

新出資料 竹苞楼旧蔵板木台帳紙背

『覚勝院抄（断簡）』——翻 刻 付 校 異——

上野 英子

はじめに

京都の古書肆竹苞楼（現、竹苞書楼）が所有し、その後奈良大学に譲渡された版木台帳の紙背から、奈良大学の永井彰教授によって、「覚勝院抄」の断簡（幻の一部と匂兵部卿卷）が発見されたのは平成二三年のことであった。永井教授をはじめとする関連諸機関のご厚意によって、文芸資料研究所ではこの竹苞楼本の影印を「年報」三〇号で紹介させていただいたのだが、引き続き今回は、竹苞楼本の翻刻を校異を付けて紹介する。すなわち、竹苞楼本の本文を分析すべく、覚勝院抄諸本の中でも書写が最も古く、かつ唯一影印が公刊されている穂久邇文庫本との異同を記した上で、それぞれの異同箇所において当該巻が現存する一〇本の諸本がそれぞれどのような動きをしているかを

示してみようと思う。

ただはじめに断つておきたいのは、今回の翻刻では、諸注を原本通りの位置に翻字することが出来ず、まとめてしまった箇所があるという点である。これは一つには版組の都合による。また一つには、本稿の目的が、原本の忠実な翻刻というよりも、諸本の校異をより分かりやすい形で提示することにあつたためでもある。そのために、あえて原本にはない枠線で翻刻全体を囲ったり、頭注に罫線を施したりもした。実際の本文の形態については前号で公開した影印を御参照いただくことにして、今回のこの処理については大方のご海容を乞う次第である。猶、本文の分析結果については稿を改めて論じたい。

凡例

- 1 本稿は竹苞楼蔵「覚勝院抄（断簡）」の翻刻である。翻刻下の欄外には諸本の主立った異同を記しておいた。
- 2 翻刻に際しては、原本通りの割り付けで翻字できず、やむなく整理・統合を試みた箇所もある。実際の本文の形態については、前号で公開した影印を参照されたい。
- 3 丁付は前回同様、穂久邇文庫本のそれに準じた。
- 4 原本では、句点・鉤点・声点・訓読点・一部の送りがな等で朱筆が用いられた場合がある。しかし翻刻では朱墨の別を明示しなかった。また朱引き・引き込み線等も割愛した。
- 5 声点は、記された清濁記号に応じて文字を清音表記、濁音表記に直して翻字した。但し同一文字に清濁両方の点が付された場合、漢字に濁点が付された場合等には、当該箇所を点線で囲み、欄外に「※」を冠してその様態を説明

した。

6 見せ消ちは、摺り消し・見せけち・重ね書き等の如何に関わらず、すべて二本の抹消線をもって記した。

7 補入部分は、当該箇所に入記号「」をおき、補入された本文にはすべて（）記号を冠しておいた。

8 漢字は原則として通行の字体を用いた。欠損などで判読できなかった箇所には□記号をあてておいた。

9 穂久邇文庫本との異同が見られた箇所には翻刻文の当該箇所に入掛けを施し、翻刻下の欄外に、具体的な異同を記した。その際以下の要領に従った。

イ 句点・鈎点・清濁・引き込み線等の異同、（ヲーを）（ものー物）といった表記法の異同、朱墨の別は割愛した。

ロ 諸本の異同は本文のみに限定し、記された場所の異同については、原則としてこれを無視した。

ハ 竹苞楼本に付箋はないため、付箋に関する異同もすべて割愛した。

ニ 便宜上、すべての異同には頭に通し番号を付しておいた。幻巻は1～57、匂兵部卿巻は1～112となる。

10 本稿で用いた諸本の略号は次の通りである。

・奈良大学蔵竹苞楼旧蔵本…竹

・穂久邇文庫蔵本…穂

・国立国会図書館蔵本…国

・天理図書館蔵万治奥書本…万

・宮内庁書陵部蔵桂宮本…書

・東京大学国語研究室蔵本…東

・実践女子大学文芸資料研究所蔵三条西家旧蔵本…三

- ・ 実践女子大学図書館常磐松文庫蔵本…常
- ・ 静嘉堂文庫蔵本…**静**
- ・ 九州大学図書館蔵本…**九**
- ・ 天理図書館蔵青谿書屋旧蔵本…**青**
- ・ 天理図書館蔵白水旧蔵本…**白**

・仏の方便にて如此歟

給へる身なるべし・それをしゐてしらずが

ほにながらふれば・かくいまはのゆふべちかき

す糸に・いミしきことのとぢめを見つるに・すく

せのほどもミづからの心のきハものこりなくミはて

て心やすきに・いまなむ露のほだしなく成にた

・目二馴也

るを・これかれかくてありしよりけに・めにならず人

びとの・いまハとてゆきわかれんほどこそ・いまひとき

はの心ミだれぬべけれ

・源氏ノ山居もし給はゞ・爰ニゐたる女房其外ミナ

召仕ハるゝ人々の・便有間敷を思召なり

・いとはかなしかし・わろかりける心のほどかなとて・御

めをしのごひかくし給に・まきれずやがてこぼるゝ御な

ミだを見たてまつる人々・ましてせきとめんかたなし・

・源氏ノ御様鉢を申そこの人々の心也

「二六才

1

申竹常静―見申穂国万書東三九青白

・爰二ある人々ノ心也

・一 さてうちすてられたてまつりなむがうれはしさ

を・をのく 打いでまほしけれど・さもえ聞えずむ
せかへりてやミぬ

・源氏の此人々をうちすて 申させ給てハと

・おもふ事をもえ申出さぬなり

・源氏ノ御心也

・一 かくのミなげきあかし給へるあけぼの・ながめ暮

し給へる夕ぐれなどのしめやかなるおりくハ・か

・中納言ノ君・中将ノ君など也

のをしなべてにはおぼしたらざりし人々を・お

まへちかくて・かやうの御物がたりなどをし給・中将の君

とてさぶらふハまだちいさくより見給なれにし

を・いとしのびつゝ見給すぐさずやありけむ・いと

かたハラいたきことに思ひて・なれも聞えざりけるを

・かくうせ給てのちハそのかたにハあらず人よりことに

・真実二けさう立たる方にてハなうて也

「二六ウ

2 申させ竹常―させ穂国万書東三九静青

白

3 おまへ竹国万書東三常九静青白―おま

（へ）穂

4 なれも竹東三常静―なれ穂国万書九青

白

おほしたりしものをとおほしいづるにつけて

らうたきものに・心と、め給へりしかたさまに

を と た

も・かの御かたみのすぢにゆけぞあはれはおほしける

中將ノ君と云は・幼少より紫上のそたてられたる人也・これをバ

源氏のちと心にかけ給人也・紫上の形ミと御覽する也

・同中將君ノ事也

・一 心ばせかたちなどもめやすく／うなひまつに

おほえたるけはひたゝならましよりは・らう／＼じと

おもほす・

聞書／うなひ松といふ事を河海ニ文選被引れとも

・同

・文選にハなき事也・礼記ニ曰檀弓より出る事歟・是も河海ニ在し事也

・人の塚をつきて其上に松をうへたるが馬の立髪ニ似たとなり

・只其人の形見と云心也・其を馬蠟のうなひ松と云也・紫上のかた

みに・中將の君を御覽するとの心也・心ばせかたちなどもめやすく

てとあり・聊紫上にも似かよひたる歟・弄花云たゞ中將ノ君ヲ

紫上の形見といへり・墳上ノ松を無キ人の形ミにみるに喩たる事也

・源氏ノ御事也

・一 うとき人にはさらにみえ給はず・上達部などもむ

・花云外人不見々不應笑・文集上陽人ノ詞ニある事也

「二七オ

5 心と、め給へりしかたさまにも（おほ

したりしものをとおほしいづるにつけて）

竹―心と、め給へりしかたさまにも（傍書

「おほしたりしものをとおほしいづるにつ

けて）穂国万書九青白―心と、めおほし

たりしものをとおほしいづるにつけても東

―心と、めおほしたりし物をとおほしいづ

るにつけても三常―心と、めおほし（た

りし）ものをとおほしいづるにつけても静

6 すちゆけぞ（を）そ竹―すちにつけ

てそ穂国万書九青白―すちをつけてそ東―

すちをそ三静―すちを常

7 あはれ（と）竹穂―あはれに国万書

九白―あはれと東三常静青

8 おほし（た）る竹穂―おほしける国

万書九白―おほしたる東三常静青

9 給人也竹国万書東三常九静青白 給給

人也穂

・
頑カウツシ

つまじき又御はらからの宮たちなどつねにま

・誰にも無し御対面也

いり給へれど・たいめんし給ことおさくなし

・同源氏ノ御心也

・人にむかはむほどばかりはさかしくおもひしづめ

ほうけたると也

心おさめんとおもふとも・月ごろにほけにたらんミの

ありさまかたくなしきひが事まじりて・すゑの

よの人にもてなやまれんのちの名さへうたて

あるべし

・人にかやうにおもはれて・誰にも対面ハあるまじきと也

・音に人の云事ハ不_レ苦人にミえてハと也・是世上ノ教ニ書也

・同源氏ノ御心也

・一 おもひほれてなむ人にも見えざむなるといは

れんもおなじことなれど・猶をとに聞ておもひや

ることのかたはなるよりも・見ぐるしきことの

めにみるは・こよなくきハマさりておこなりとおほ

「二七ウ

・夕霧也

せば・大将の君などにだに・みすへだて、たいめん

・同源氏ノ御心也

し給ける・かく心がはりし給へるやうに人のいひつ
たふべき比ほひをだにおもひのどめてこそ小ねん
じすぐし給つ、・うき世をもえそむきやり給
はず・

・聞書・紫上ゆへばかりに・かやうなると人の申さん所を憚給て・隠遁せら
れうずる事をもしづめらるゝと也・如^レ此ノ心仕万ニ奇特也・比ほひと

云詞干要也

・同源氏ノ御心也

・一

御かた^くにまれにもうちほのめき給につけてハ・ま

づいとせきかたき涙の雨のミふりまされバいと

わりなくて・いづかたにもおほつかなきさまにて過

・あかしの中宮也

・内裏へ也

し給

・自然に人に對面
し給にもと也

・匂宮也

て・三宮をぞさう^くしき御なぐさめにはおはしま

させ給ける

・あかしの中宮ハ内裏へ參給て・匂宮を
源氏の御そはに・御ときに・被^レ覆申也

・母の、給し

・匂宮ノ御心也

「二八才

10 隱通竹書三常靜青白一院（隱）遁穂一

院通国万九一穂道東

※「く」に濁点。

11 御ときに竹東三常靜一御とき穂国万書

九青白

かバとて・たいの御まへの紅梅小・いとしとりわきて

・源氏ノ御心也

うしろミありき給を・いとあはれと見たてまつりたまふ・

・聞書

御法の巻のすゑに・匂宮を紫上のまへに置給て

＼・おとなに成給なバこゝに住給て・此たいのまへなる紅梅と桜と

は・花のおりくゝに心と、めてもてあそび給へ・さるへからんおりは

・仏にもたてまつり給へと・病中ニの給よりて・此梅を匂宮

のなつかしく思ひ給て・うしろミありき給を・源氏のあはれと思ひ給也

・草子地也・これより二月ノ事を書也

・一 二月になれば花の木どもの・さかりになるもまだ

しきも・木ずゑおかしうかすみわたれるに・かの

御かたみのこうばいに・うぐひすのはなやかになき

いでたればたちいで、御覧ず

・源氏御覧する也

・源氏 心ハ明也 紫上ノ事也

二条ノ院ノ事也

＼うへてみし花のあるじもなき宿にしらず顔にてきぬる鶯

「二八ウ

12 御まへ竹常静―まへ穂国万書九青白―

御まへ東―（御）まへ三

13 紅梅小―竹穂三―紅梅はいと国万書

九青白―紅梅東常静

・源氏也

・其時の事也

・一　とうそぶきありかせ給・春ふかくなりゆくまゝ、

・紫上仕給つる所の事也

に・御まへのありさまいにしへにはあらぬをめで給
かたにはあらねどしづ心なくなにごとにつけても
むねいたうおぼさるれば・おほかたこの世の外の

・山ノ奥同前也

やうに鳥の声も聞えざらん山のすゑ・ゆかしうのミ
いとゞなりまさり給

・道心をもおこされて・山籠をもせられ度と

の事也・誠の山を思召やり給也・弄説

・引歌／飛鳥の
声も聞えぬおく山の
深き心を人ハしら
なん

・同源氏ノ御心也　・これより六条ノ院とミゆ

・一　やまぶきなどの心ちよげにさきミだれたるも

・うちつけに露けくのミ見なされ給・ほかの花ハひ

とへちりて・八重さく花ざくらさかり過て・かばざくらハ・

ひらけ藤ハをくれて・色づきなどこそハすめるを

・そのをそくとき花の心をよくわきて・色くを

・カバザクラ
樺桜

「二九才

つくしうへをき給しかば・時を忘れずにはひ

・匂宮也・同詞也

みちたるに・若宮まろがさくらハさきにけり

・いかでひさしくちらさじ・木のめぐりに木丁を

たて、かたびらをあげずは・風もえ吹きよらじと

・かしこうおもひえたりと思ひての給かほの・いと

・源氏ノ御心也

弄云

うつくしきにもうちえまれ給ぬ

三ノ宮幼稚

の心二条ノ院六条ノ院無分別也云々・一説まろが桜との給程に

二条ノ院と云説在之・聞書 さはなき也・六条ノ院とみえたり・桜ハ

いづくにてもあれ・我桜との給とみるよきなり・聞書・木の

めぐりに木丁をたて、と・匂宮の、給事知恵ノ賢キ事也・唐タカラの

穆宗カウフの如ごと此せらる、事あり・くハしく花鳥二被レ記たるなり

・源氏ノ御心也

・一 おほふばかりの袖もとめけむ人よりは・いとかし

「二九ウ

・たとい命ハある
とも・対面ハある
間敷と也

こうおほしより給へりかしなど・この宮はか
りをぞもてあそびみたてまつり給・

・引歌\ 大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせし
・ 匂宮の御心は此歌の作者の心よりハかしこきと源氏
のおほしめしたるなり

・ 匂宮さして源氏ノの給也

・ 山居をもし給ハんと也

・ 一 君になれきこえんことのこりずくなしや・い
のちといふもの・いましばしかづらふべくとも・たい

・ 源氏ノ也

めんハえあらじかして・例のなみだくミ給へ

匂宮ノ心也

れば・いと物しとおほして・母のの給しことを・まがく

・ 紫上ノ事也

しうの給とてふしめに成て・御ぞの袖をひき

まさぐりなどしつゝまぎらハしおはす・・ 匂宮ノ舁也

・ 紫上の、給しやうに・又源氏の残りずくなしとの給を・ 匂宮の

いまくしきと思給て・くすみておはしますなり

・ 御ぞの袖を云を・ 源氏ノ御袖を匂宮ノまさぐり給とも・又匂宮ノ我袖何

「三〇才

14 紫上ノ事也竹東三常静―(ナシ) 穂国
万書九青白

にても也 兩説也

・源氏也

・ すみのまのかうらんをしかゝりて・おまへの

庭をも・みすのうちをも見わたしてながめ給

・紫上ノ召仕ハれたる人ノ事也・其ま、服衣を着たる人の事也

女ばうなどもかの御かたみの色かへぬもあり・れ

・是ハ除服の人成へし

いの色あひなるもあやなどはなやかにハあらず

・ ミづからの御なをしも色はよのつねなれど・ことさら

やつしてむもんをたてまつれり

・御座所也

・紫上ハ本妻にハ
なき御心の色也

・御しつらひなどもいとをろそかにこと

そきて・さびしくもの心ほそげにしめやかなれば

・源氏 心ハ明也

・紫上ノ事也

／今ハとてあらしやはてんなき人の心とゞめし春の垣ねを

・源氏ノ御心也

・ 人やりならずかなしうおぼさる

・人のやとふ事にてもなき事也
・我心より悲しきと也

・ いとつれくなれば入道の宮の御かたにわたり給

・女三ノ宮へ源氏御出也

」三〇ウ

15 召仕ハれたる竹東三常静―召仕つれたる穂国万書九青白

16 ことそきて竹東常静青―ことそきて
(傍注「省略也」) 穂国万書三九白

※「く」に濁点。

・匂宮也

に・若宮も人にいだかれておはしまして・こなたの

・薫也

・此し休字也

わか君とはしりあそび・花ををしみ給心ばへど
もふかゝらずいといはけなし・

・聞書　・源氏ノ入道の宮ニ

わたり給とあるハ・二条ノ院より六条ノ院へ只今わたり給にハあらず

以前六条ノ院へわたり給しと・心うべし若宮も人にいだかれてと

あり・二条ノ院より・六条ノ院へ只今渡給とハみえず・いかさまにも六条

の院にての事とみるべし　・弄花説同し

・女三ノ宮

・一

宮ハほとけの御まへにて経をぞよみ給ける・なに

ばかりふかうおほしとれる御道心にもあらざり

しかども・この世にうらめしく御心みだるゝことも

おはせず・のどやかなるまゝにまぎれなくおこなひ

給て・ひとつかたにおもひはなれ給つるもいとうらや

・源氏ノ御心也

「三二一才

※「君」に濁点。

17 あらざりしかとも竹―あらざりしかと
も穂国万書東三九青白―あらざりしかと常
静

・浅也・御法ノ巻にもある詞也

ましく・かくあさへ給へる女の御心ざしにだに
をくれぬること、くちおしうおぼさる・

・女三ノ宮のあさき御心にさへおとりて・いま、で源氏の隠遁を
もせられぬこと、なり

・閑伽也

一 あかの花の夕ばへしていとおもしろくミゆれば

・源氏ノ御詞也

・紫上ノ事也

・仏に時花を参する事也
・とき／＼の花成べし

・春に心よせたりし人なくて・花

の色もすさまじくのミ見なさるゝを・仏の御

・同源氏ノ御詞也

かざりにてこそみるべかりけれとの給て・たいのまへ

六条ノ院紫上ノ住給し方也

の山ぶきこそ・猶よに見えぬ花のさまなれ・ふ

さのおほきさなどよ・しなたかうなどはをきて

ざりける花にやあらん

・山吹ハ別而上蔵しき花にハあらぬと也
・名たかくなどハをきてざりけりとなり

・はなやかににぎは、しきかたはいとおもしろ

「二一ウ

※「さ」に濁点。

18 おほきさ竹東三常静—おほき穂書青白

—おほしき国万丸

・賀茂ノ祭ノ事也・押出テ祭ト云ハ・賀茂ノ祭ノ事也・四月丙ノ日也
 などおほしやる・女はうなどいかにさうくしからん

・源氏ノ御詞也

・前二ある人也

・さとにしのびていで、みよかしなどの給・中将の君

・源氏也

のひむがしおもてに・うた、ねしたるを・あゆみおは

・ちいさき事也

して見給へばいとさゝやかにおかしきさまして・おき

あがりたりつらつき・はなやかににほひたるかほを

スム也髪ノそ、けたる事也

もてかくして・すこしふくたミたるかミのか、りなどい

・同中将ノ君ノ事也・同中将ノ君ノ着したる也・弄云紫上へ志深で・服ノ色ヲ替ザル也

とおかしげ也・くれなゐのきばみたるけそひたる

・萱草也

はかま・くわさう色のひとへいとこきにび色に・くろき

などうるはしからずかさなりて・裳からきぬもぬぎ

すべしたりけるを・とかくひきかけなどするに・あふ

・中将ノ君ノをきたる也

・源氏也

ひをかたはらにをきたりけるを・よりてとり給て

「三七ウ

※「く」に濁点。

※「た」に清点。

19 萱草也竹国東三常九静白―薔(萱)草
 也穂―(ナシ)万―萱草也書青

20 よりて(※「よりて」に傍点。傍書
 「イ」竹―よりて穂国万書九青白―(ナ
 シ)東静―よりて(※「よりて」に見せけ
 ち、傍書「イ」三常

・ 一／まどをうつこゑなどめづらしからぬふることをう

・ 源氏也

ちずし給へるもおりからにや

・ 歌々 残燈背壁影

・ 簾々 暗雨打し窓声

・ 白氏文集

夕霧ノ心也紫上ニきかせましかバと也

・ 源氏ノ御声ノ事也

・ 一／いもがゝきねにをとなはせまほしき御こゑなり・

引歌／独して聞ハかなしき時鳥いもかきねにをとなはせばや

・ 源氏ノ御詞也

・ 一 ひとりずみハことにかはることなけれど・あやしうさ

うくしくこそありけれ・ふかき山ずみせんにも・かくて

身をならはしたらんハ・こよなう心すみぬべきわざ
なりなどの給て・女房こゝにくだものなどまいらせ

よ・をのこどもめさむも・ことくしきほどなりなどの

・ 同源氏ノ御事也

給・心にハたゞ空をながめ給・御気色の・つきせず

「三九才

21

歌々 竹東常一歌々 穂々 穂々 秋々 国

万三九 静青白一歌々 書

※「く」に濁点。

・夕霧ノ心也

心ぐるしければ・かくのミおほしまぎれずハ・御お
こなひにも心すまし給はんこと・かたくやと見たて

・同夕霧ノ心也

まつり給・ほのかに見し御おも影だにわすれがたし

・ましてことほりぞかしとおもひ給へり・

・聞書・紫上を野分の朝・夕霧のミ給し事也・それさへあるに・いはんや源氏

の年月馴給御中なれば・御ことほりとなりと也

・源氏ノ御心也

ふイ ふ

・一

きのふけふとおもひ給^ふるほどに・御^ミはてもやう

・八月也紫上一周忌成べし・夕霧詞也

やうちかうなり侍にけり・いかやうにかをきてお

ほしめすらむと申給へば・紫上の御事をハ・何とか

し給はんずらんと也

・なにばか

りよのつねならぬことをかハものせむ・かの心ざしをかれ

・曼荼羅ノ事・委ク河海被記之

たるごくらくの^まんたらなど此たびなむくやうす

・誰共なし

べき経などもあまた有けるを・なにがし僧都み

「三九ウ

22 ことはり竹国万書東三常九静青白―こ
骨(と)はり穂

23 給^ふへ(ふ)る竹常―給へ(傍書「ふ
イ」る穂国書九青白―給へる東万―給ふ
る三静

24 河海被記之竹三常―河海被説之穂国書
九青白―河海之説也万―河海二記之東―河
海被注之静

※「ま」に濁点。「た」と誤ったか。

・紫上ノ常ニ善事ノ心有つる事也

なその心くはしく聞きたなれば・又はへてすべき
ことゞもかのそうづのいはむにしたがひてなむ・ものす
べきなどの給・かやうのこと（。とも）もとよりとりた
・紫上ノ仏法方ノ事ヲ・思召提テたりし事也

・句ヲ切テ可レ読也

てゝおほしをきてげるハ・うしろやすきわざなれど・こ

・此世ニハといふより・一段ノやうに可レ心得也

・形見

のよにはかりそめの御ちぎり成けりと見給にハ・かたミ
といふばかりとゞめきこえ給へる人だにものし給
はぬこそ・くちおしうはべりけれと申給へば・紫上に御子のな

き事を・夕霧の、給なり

・源氏ノ御詞也・夕霧へ返答也

・一
それはかりそめならずいのちなかき人々にも・さやうな
ることの・おほかたすくなかりける・ミづからのくちおし
さにこそ・そこにはかどはひろげ給はめなどの給・

・聞書・我に子のすくなき事・殊紫上ニなき事も定り事と也・／＼そこにとハ

夕霧を指て・御子多持給とノ事也・そこハ足下也・河云・于公高門ノ心也

・聞書 四馬高蓋ノ事也・夕霧ニ御子あまたあるとなり

「四〇才

25 こと（。とも）竹―こと穂国万書九青
白―ことも東常静―こととも三

26 それはかりそめならず竹東三常静―そ
れはかりならず穂国万書九青白

27 人々にも竹常―人々にも穂国万書東三
九静青白

28 かと竹常―かと（傍書「門也」）穂国
万書東三九静青白

・前ノ詞ニいた
うもの給出ぬこと
いふによりて
／＼いかにしりてか
といふ歌をひけり
・妙也

・源氏ノ御心也

・紫上ノ事ニ也

・一 なにごとにつけても・しのびがたき御心よはさにつ、
ましくて・過にしこといたうもの給いでぬに・山時鳥
のほのかにうちなきたるも／＼いかにしりてかときく人
たゞならず・河引歌／＼いにしへのことかたらへばほとゝきす
いかにしりてかふるこゑになく

・源氏 心ハ明也

／＼なき人をしのぶるよひの村雨にぬれてやきつる山ほとゝぎす

源氏也

・夕霧也

・一 とていとゞ空をながめ給大将

・夕霧／時鳥君につてなむふる郷の花橘はいまぞさかりと

／＼君につてなむとハ紫上をさしての事也・しでのたをさなれば・此よし

をむらさきのうへへ・つけ申せとなり

・紫式部詞也

・一 女房などおほくいひあつめたれどとゞめつ

・敬おほけれども
かゝぬと也

・夕霧也

源氏ノ御殿めをし給也

・一 大将の君はやがて御とのゐにさぶらひ給さびしき御

夕霧ノ御殿めし給也

ひとりねの心ぐるしければ・とき／＼かやうにさぶらひ給
源氏也

「四〇ウ

29 つけても竹国万書東三常九静青白―つ
けて(も)穂

30 山時鳥の竹国万書東常九静白―(も)ま
たれつる(山時鳥の穂青―またれつる時鳥
の三

に・おはせし夜はいとけどをかりしおましのあたり
の・いたうもたちはなれぬなどにつけても・思ひ出

・紫上ノ在世ノ時ハ遺達かりつる事を・今源氏ノ御殿ををし給と也・六月ノ事成べし
らるゝこともおほかり・いとあつき比すゞしきかたに

てながめ給に・いけのはちすのさかりなるを見給

・極楽ノ蓮ノ・いかにおほかるんと也

に・いかにおほかるなどまづおぼし出らるゝにほれく
しくて・つくくとおはするほどに日暮にけり

・聞書・蓮のうへの露を見給て・いかにおほかるとおほしいてたる

べし妙々／＼一々池中華物満——五会ノ撰

・源氏ノ御前也

・一 ひぐらしの声はなやかなるに・おまへのなでしこ

の夕ばへをひとりのミ見給ハ・げにぞかひなかり

ける・河引歌／＼我のミぞあはれとハみる日ぐらしのなく夕暮の山と桜に

・花鳥云此歌ニヨリテ・独ノミミ給トハ書リ云々・聞書・此引歌不似合ト也

・源氏

／＼つれく和我明暮す夏の日をかごとがましき虫の声哉

「四一才

31 などにつけても竹三常——などにつけて

も徳国万東九青——などにつけて静白書

32 さかりなるを竹国万書東三常九静青白

——さかりな（る）を穂

33 此引歌竹国万書東三常静青白——此（る）

引）歌穂九

※「く」に濁点。

・源氏御詞也・スム也

・一 ほたるのいとおほうとびかふも 夕タ殿テンにはたと

むでと例のふることとかゝるすぢにのミくちな

れ給へり・河云・長恨歌・夕タ殿テン螢エ飛イ思イ消イ然ニ・秋灯挑尽ツキノ触ノ眠

・源氏

／夜をしる螢をみても悲しきハ時そともなき思成けり・

・花云

・兼葭ツシガ水晴シメル・螢エ知ル・夜・朗詠 螢ハ夜ばかりもゆる我ハ昼夜共ニ

もゆるおもひとなり

・これより七月二成也

・一 七月七日も例にかはりたる事おほく・御あそびな

フツキ

・源氏也

どもし給はでつれくにながめ暮し給て・ほし

同源氏也

あひみる人もなし・まだ夜ふかうひとゝころおき

給て・つまどをしあげ給へるに・せんざいの露いと

しげくわた殿のとよりとをりて見わたさるれ

「四一ウ

※「殿」に清点。

34 挑尽ツキノ触ノ眠竹常―挑尽ツキノ触ノ眠 穂国万書東三九青―

挑尽ツキノ触ノ眠 静―挑尽ツキノ触ノ眠 白

35 七日も竹国万書東常九静青白―七日も

穂三

ばいで給て

・源氏

・心ハ明也

／＼七夕の逢瀬ハ雲のよそにミテ別の庭に露ぞをさそふ・

・一／＼風の音さへたゞならず成ゆく比しも・御法事の

いとなみにて・つゐたちごろはまぎらハしげなり

・聞書・紫上の御事に法事ある也・／＼かぜの音さへたゞならず・引歌／＼秋ハ猶夕

まぐれこそたゞならね萩のうは風はぎの下露・此心もあり

・源氏ノ御心也

・一／＼いま、でへにける月日よとおぼすにも・あきれて

あかし暮し給・引歌／＼人の身もならハし物をいま、でに

かくてもへぬる物にぞありける

・紫上一周忌也

・齋食也

・一御正日にはかみしもの人々みないもゐして・かのまん

だらなどけふぞくやうぜさせ給

・一周忌ならねとも正月

正日アルナリ

・源氏也

・一例のよひの御おこなひに・御てうづなどまいらするに

・中将の君のあふぎに

・前にある中将ノ君也

「四二才

36 齋食也竹東三常酔―(ナシ)穂国万書
九青白

中將ノ君・心ハ明也

君恋ふる涙ハきハもなき物をけふをバ何のはてといふらん

・源氏也

一 とかきつけたるを・とりて見給て

・源氏

・心ハ明也

人恋ふる我ミもすゑに成ゆけど残りおほかる涙成けり

・綿也

一 とかきそへ給・九月になりて九日に・わたおほひたる

ナガツキ

菊を御覧じて

・源氏

・心ハ明也・諸友ニハ源氏と紫上との事也

もろともにおきゐし菊の朝露も独たもにかゝる秋哉

・引歌・後撰 菊イ

諸友におきゐし秋の露ばかりかゝらんものと思ひかけきや

一 又これより十月ノ事也

・源氏也

神無月にはおほかた時雨がちなる比いとゞなかくめ給て
夕暮の空のけしきも・えもいはぬ心ほそさにふり
しかど、ひとりごちおはす

・引歌・後撰

神無月いつも時雨ハ降しかどかく袖ひつるおりハなかりき

「四二ウ

<p>・蜀ノ国ノ事也</p>	<p>・源氏ノ御心也</p> <p>一 雲居をわたる雁のつばさも・うらやましくまも られ給 <small>・列をはなれぬ妹を・うらやましく思召也</small></p> <p>・源氏</p> <p>／＼大空をかよふまほろし夢にだにみえこぬ玉の行衛たづねよ</p> <p>・河云 まほろしハ幻術事也 <small>・仍述者を・まほろしといふ也・此歌の心は</small></p> <p>・蜀方士か <small>・蜀方士ハ揚貴姫にたづねあひたりし事也・方士ハ述者の惣名也</small></p> <p>・雁のつばさもうらやましくといへるも・彼方士が碧落 をきハめて・奔<small>ハシ</small>こと電のごとしといへる心歎</p> <p>・同源氏ノ御心也</p> <p>一 なにごとにつけてもまぎれずのミ・月日にそへて おぼさる・五せちなどいひて世中そこはかとなく</p> <p>・夕霧也</p> <p>いまめかしげなる比・大将殿は君だち・わらハ殿上</p> <p>・つれ申されて也</p> <p>し給（。て） <small>・フタリ</small> <small>・葵上ノ兄弟也</small> <small>・やゐゆせまいり給へり・おなじほどにて二人</small></p> <p>いとうつくしきさま也・御おちの頭中将くら人の少将な</p> <p>「四三才</p>
----------------	--

37 仍述者を竹国万書東三常九静白―仍述

（幻術）者を穂―幻術者を青

38 揚貴姫竹万書東常九―揚貴姫（妃）穂

―揚貴妃国三静青白

39 述者の竹国万書東三常九静白―述

（術）者の穂―術者の青

40 し給（。て） ・やゐゆせ竹常―し給へる

ゐて穂国万書九青白―し給て東静―し給て

やゐゆせ三

・小忌也・小忌の公卿と云て・これに当ル人着する也・大忌衣

どをみにてあをずりのすがたどもきよげにめや

・河云青柳・山藍ノ摺也

すくて・みなうちつゝきもてかしづきつゝもろともに

まいり給・花云・十一月中ノ卯ノ日・新嘗会・辰ノ日豊ノ明リノ節会ニハ・山

藍ニテすなる小忌と云物を着する也・一代ニ一度ノ大嘗会ニモ如此

・源氏ノ御心也

・一 おもふことなげなるさまどもを見給に・いにしへ

・弄云・万ツ思召
すてたれ共と也

日蔭也

あやしかりしひかげのおり・さすがにおほし

いでらるべし・聞書・夕霧の君だちを引つれて・内裏へまいり給

を御覧じて也・河云・乙女ノ通卷ニある・昔御日とまりし乙女の姿

とありし事歟・筑紫の五節などの事也・須磨ニ音信し入ノ事也

に

源氏ノ宮人ハ豊のあかり^にいそぐけふ日かげもしらで暮し
つる哉・

・弄云 日かげのかづらによせて・日月の光も暮たると也・日蔭ハかづらに

よせて・糸を結て付るなり

・同源氏ノ御心也

・一 ことをばかくてしのびすぐしつれバ・いまハと世を

さり給べきほどちかくおほしまうくるにあはれなる

・御隠通ノ事也

「四三ウ

41 大嘗会竹東三常静白―大嘗穂国万九青

―大嘗(会)書

42 あかり^に竹―あかりと穂国万書

東三九青白―あかりに常静

ことつきせず・やうくさるべきことゝも御心のうちに
おほしつゝけて・さぶらふ人々にもほどくにつけて物
たまひなどおどろくしくいまなむかぎりとしな
・事くしくハなうて也

し給はねど・ちかくさぶらふ人々ハ御はいとげ給べき
けしきと見たてまつるまゝに・年の暮ゆくも心ほそ
くかなしきことかぎりなし
・源氏御隠遁あらうする様を
・そのくミ奉るなり

・一 おちとまり、て・かたハ成べき人の御ふみども、／や

・花云・源氏隠居之事・此詞にもみえたり

ればおしとおぼされけるにや・すこしづゝのこし
給へりけるを・ものゝついでに御らんじつけて・や

・此引歌までもなし云々・され共・称も説給也

らせ給などするに
・引歌 〳やれハおしやらねは人に見えぬへし
・後撰 なくくも猶返すまされり

・一 かのすまの比ほひ・所、よりたてまつり給けるも

・同源氏ノ御心也

「四四才

43 けしきと竹東三常静―けしと穂国万書

九青白

44 御隠遁竹国万書三常九静青白―御隠遠

穂―御隠遠東

・紫上ノ御て也・源氏ミ付給也

あるなかに・かの御手なるはことにゆひあはせてそ
ありける・ミづからしをき給けることなれど・ひさし
う成ける世のこと・おぼすに・たゞいまのやうなる
すみづきなど・げに／ちとせのかたみにしつべかり
けるを・みず成ぬへきよとおほせばかひなくて・うと
からぬ人々・二三人ばかりおまへにてやらせ給・

・引歌・六帖

／かひなしと思なわびそ水葦の跡ぞちとせの形見なりける

・これほどなき人たに也

・一
いと かゝらぬほどのことにてだにすぎにし人のあとゝ見

・弄云・清少納言枕草子にも・哀ナル物ニかけり

・紫上ノ事也

るはあはれなるを・ましていとゝかきくらし・それと

・源氏也

も見わかぬまでふりおつる御なみだの水ぐきになが
れそふを・人もあまり心よはしと見たてまつるべ

「四四ウ

きが・かたはらいとうはしたなければをしやり給て

・源氏

・紫上ノ事也

・鳥ノ跡ノ事也

／＼しての山こえにし人をしたふとて跡をミつゝも猶まどふ哉

・そこにある人々也

・源氏ノ御歌ノ事也

一 さぶらふ人々もまほにへえひきひろげ^{（はて）}ねどそれと

ほの^{（く）}見ゆるに・心まどひどもをろかならず・この

・紫上ノ事也

世ながらとをからぬ御わかれのほどをいミじとおぼしける
まゝに・かい給へることの葉げにそのおりよりも・せき
あへぬかなしさやらんかなし<sup>・紫上のうせ給し時よりも
今ハ猶かなしきと也</sup>

・源氏ノ御心也

の

一 いたうたていま^{一きは}は^{（は）}・御心まどひもめ、しく・人わ

ろく成ぬへければよくも見給はでこまやかにかき給

へるかたはらに<sup>・人のミ申所も安全しきやうなれば・紫上ノ書給文
を・能も御覽せずして・歌を書付給なり</sup>

「四五才

45 （はて）ねと竹―ねと穂国万書九青

白―はてねと東常静―はずねと三

※「く」に濁点。

46 この葉竹東三常静―こと葉穂国万書

九青白

47 一きはは^{（の）}竹―一きは^ハ（傍書）の

イ）穂国万書九白―一きはの東三常静青

48 女々しき竹国三常静―女々（ら）しき

穂―女らしき書青―女□（空白）き東―女

ミしき万九白

・源氏 書集て也 ・心ハ明也

／＼かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲めの煙ともなれ

を

・これより十二月ノ事也

・とかきつけてみなやかせ給つ・御佛名もことしばかり

・錫杖也

にこそはとおぼせばにや・つねよりもことにさくぢやう
のこゑくなどあはれにおぼさる・聞書・十二月十九日より・廿一日
まで二ヶ日也・近來ハ應

・天下国土泰安の
佛名也

・同源氏ノ御心也

日なれば以て日彼行之
・仏名はて、讀業ある也

・ゆくすゑながきことを恋ねがふ
も・佛のきゝ給はむことかたはらいたし

・聞書・導師の表白よむ・行末長久との事をよむを・源氏の開始て・我ハ
やがて道心の身体なるにと思召て仏の開始ハん事かたはらいたきと也

・一 雪いたうふりて・まめやかにつもりにけり・だう

・源氏ノ御前也

しのまかづるをおまへにめして・さか月などつ
ねのさほうよりもさしわけ給て・ことにろくなど
給はす・仏名ニ勸益の事ある也
・花鳥ニ委敷ふえたり・年ごろひさしくまいり
「四五ウ

49 煙とも（傍書「を」「イ」なれ竹東三
常静―煙ともなれ穂国万書九青白

50 酒宴竹国万書東三常九静青白―酒
（宴）穂

・源氏御覧馴たる也

・おほやけにもつかうまつりて・御覧じなれたる御

・白髪したる也

だうしの・かしらはやうく色かはりて・さぶらふも

あはれにおぼさる・白頭・夜札・
・仏名経ノ心也・例の宮たちかん

・よく合
なる事也

だちめなど・あまたまいり給へり・梅の花のは

つかにけしきはみはじめて・雪にもてはや

されたるほどおかしきを・御あそびなどもありぬ

べけれど・なをことしまでハ・ものゝねもむせび

ぬべき心ちし給へば・ときによりたる物うちずん

しなどばかりぞせさせ給・愛にて少し・朗詠
などしてなり・まことや

だうしのさか月のついでにかゝることありき

・源氏

・春までの命もしらず雪のうちに色づく梅をけふかざしてん

心ハ明也

「四六オ

51 かかることありき竹東三常静―（ナ
シ）徳国万書九青白

・一 御かへり

・導師ノ御返し
・心ハ明也

／＼千代の春みるべき花と折をきて我身ぞ雪と友にふりぬる

・紫式部詞也

・一 人々おほくよみをきたれどもらしつ・

・あまたあれどもかゝぬと也

源氏御簾より出給也

・一 その日ぞいでゐ給へる・御かたちむかしの御ひかりに

も又おほくそひて・ありがたくめでたくみえ給を

・このふりぬるよはひの僧ハ・あひなう涙もとゞめ

・源氏ノ御心也

ざりけり・

・佛名の僧の源氏を
・ミまいらせてなり

・とし暮ぬとおぼすも

・匂宮也

心ほそきに・わか宮のなやはむに・をとたか

かるべきこと・なにわざをせさせむと・聞書・追難と云て

いづかたにもたゝきて・鬼やらひする事也・なやらふと云

その事也

・一 はしりありき給も・おかしき御ありさまを見ざ

「四六ウ

52 よみをきたれと竹東三常静―よみたれ

と穂国万書九青白

53 もらしつ竹万書東三常静青白―も

らしつ穂国九

54 いてゐ給へる竹東三常静―いて給へる

穂国万書九青白

らんことゝよろづにしるのびがたし

・源氏

／＼よハヒイ

／物おもふと過る月日もしらぬまに年も我世もけふやつきぬる・

・上ノ句ハ敏忠歌也／物おもふに過る月日もしらぬまにこと

しもけふにはてぬとぞきくと云を・上ノ句を其まゝをきて

・年も我世もと読給也・一鉢二書之事也面白なり

・正月元日ノ事也

・一 ついたちの程のこと・つねよりことなるべくと

をきてさせ給

・源氏御隠遁あらうずと思召て。名残おしミ
に一入に万をせらるゝなり

・源氏ノ御心也

・一 御子たち大臣の御ひきいで物・しなく^くのろく

どもな^はと^{（。）}に^{（。）}なふ・おぼしまうけてとぞ

・やがて御隠遁の御心に・かやうの事をも・結構をもとりつ

くろはれてし給となり

（白 紙）

「四七ウ

「四七オ

55 年も我世も竹国万書三常九青白―年
（も）我世も穂―年も我ミも東―年も我
世（傍書「ミ」「イ」）も静

※「く」に濁点。

56 な^はと^{（。）}に^{（。）}なふ竹―なにとなふ穂

国万書九青白―なにとになふ東―な^はと^は

（に）なふ三―なとなふ常静

57 （ナシ）竹書東三常静青白―一校畢穂

国万九

・匂兵部卿・第二十七

・例ノ世人ハ匂兵部卿・薫中将ト聞ニク、イヒ
ツバケテ・是ヲ名とする也

・匂兵部卿宮トイ

聞書

ヘバ・余ニ長キ程

ニ・兵部卿ヲ略シ

テ匂宮ト云也

・此卷ヨリ薫ノ年

ヲ立ル也

・此前マデハ・源

氏ノ御年ヲ立ル也

・六才ヨリ・十四

オマデ・九年也

・卷の名の事以^レ詞名とする也・又ハ可^レ謂^ル薫大將^ノ
のまきととも也　・弄云・**此卷**^ハ幻卷の次年より

薫^ル二月に元服とあるまで九ケ年也・薫ハ幻に五

歳此卷のはしめに・十四歳とあり・此卷のすゑに

春の事あり・薫十四才にて二月元服・其あき

中将に任^ス・又十九歳にて三位^ノ宰相に任の事あり

・以下の並^ビ卷々^ヲ宇治に至てハ・此卷に混乱

せる所あり別に抄物あり

・聞書・幻卷と

此卷との間に・雲隠といふ事を立て置たるなり

・薫と匂宮との間九年也・此内に源氏ノ崩可^レ在之也

「四八才

白 1 此卷ハ竹東三常靜―此卷穂国万書九青

<p>・五歳ヨリ七歳マ デノ事不_レ見其年マ デラ・入_レハ八年也 ・此物語ニ雲牀別 々ニ卷ニ在_レ之雲隠 ノ卷ハ・無言無説 也是ガ中道ヨリ見 卷ト紫式部ガ心也 ・此雲隠卷ハ天人 ノ下テ取タルナド ノ説種々ニ云説也 ・日本ニモ生有テ 死ノナキハ・弘法也 ・死有テ生ナキハ ・廃廟也 ・生モナク・死モ ナク・始終ヲ不_レ 知ハ・人丸也 ・雲隠ト云詞ハ・ 之ハ凶事ト可_ニ心 得_一也</p>	<p>幻_ノ卷ハ薫_ハ五歳とあり・六歳より十六才までの 内に可_レ在之・雲隠の卷の内に（朱雀院 源氏の君（螢兵部卿宮）髭黒又ハ 致仕大臣・此五人以下の死去いづれも在之也・薫の廿の春ま で成へし・雲隠といふ卷なければ落つかぬなり ・其子細ハ其内に人の逝去以下の事在之也・雲隠と いふ卷の欠事・益網経にも書_シの名ハありて・な き事在之・其とおなじ事となり・花鳥二天 台法間などの事ニたとへて被_レ記之其までもなし 雲隠といふハ・人のなく成事也・禁忌の詞と也されども 紫式部も（メグリ逢テミシヤソレトモ分ヌマニ）雲がくれにし夜はの月影と云り ・金葉にも（日ノ光アマネキ空ノ気色ニモ）我身ひとつハ雲隠して云々・これハ述懐の歌也 ・是ハ堀川院御時信茲ガ式部丞ヲ望時・申文ニソヘタル歌也・二首ナガラ・凶事ニテハ有マジキト也 ・何レヘモ可_レ通也</p>
<p>（※以下行間注）・雲隠卷ヲ可_レ書ナラバ・源氏ノ誕生カラ・和漢ノ能芸万事美麗天下ノ右族已下一世五十二ノ間ノ事 ヲ不_レ残書・嵯峨院ニ隱遁テ臨終ノ事マデヲ書テモ・只に物語ノ次也・所詮不_レ書シテ雲隠卷ノ内ニ・籠ラセタル 事・紫式部ガ寄に・深心ミヘタル也・シカルヲ・前々ノ卷々に更衣ノ事・葵上紫上以下・哀ナル事共・書尽シタルニ 依テ・不_レ書ト云説在_レ之・以外ノ惡説也ソレハ紫式部ガ心ノ法令ヲ不_レ知人ノ云事也・一切ノ怪ト云事モ不_レ謂シテ・ 聞ユル様ノ類此等也卷ノ名有テ詞ノナキ事・漢土ニモ晋始皇ノ五穀ヲ嘗書ナド斗ヲ置テ・悉焼ステラレタルヲ・土ニ 埋ミ・洞ニ隠シテ・今アルハ残リタル書也・此等モ名ハ有テ・詞ハナキ也・毛詩ノ六百篇ニモ有_ニ其名_一亡_ニ其名_一</p>	<p>「四八ウ</p>

- 2 （朱雀院）竹東
— 朱雀院穂国万書三
常九静青白
- 3 （螢兵部卿宮）竹
— 螢兵部卿宮穂国万
書三常九静青白—（
螢兵部卿宮東
- 4 所詮不_レ書竹東三
常静—所詮不_レ虚穂国
万書九白—（ナシ）青
- 5 書（傍書「シヨ」）
竹三静—書穂国万書
東常九青白
- 6 更衣ノ事竹東常
静—シヨ更衣ノ事穂
国万書三九白—（行
間注ナシ）青

・此卷桐壺ニ当ル也・幻卷マデ・源氏ノ御事ヲ勘へ・此卷カラ・薫ノ事ヲ勘ル故也

されども先ハ雲隠といふ詞ハ・人の無ことをいへば

可^レ斟酌^ニ也云々・山路ノ露ト云物在之・此物語ニ・滅タル事ヲ書タルト云々・正躰ハ

何トモナキ者也・努々不^レ可^レ用也・源氏ハ頓滅ト云説在之・サナキ証拠ニハ〳〵故院失

給テ後・^{原本ニ}三斗ノスエニ・世ヲ背キ給シ・嵯峨ノ院ニモサシノソク人ノ心ヲサメン方

ナクナン侍リケルト云リ・嵯峨院ニ隠居シ給ト聞えタリ・然ハ雲隠卷トテ一帖アル上

ハ・其卷ノ中ノ久遠ハカリガタシ・六条院斗ヲ頓滅ト云事不^レ謂事也・河ノ説同前也

・六条ノ院

・源氏崩給後と云事也・太上天皇ト申ヨリ・崩御ト申也

一 ひかりかくれ給にしのち・かの御かげにたちつぎ

給べき人・そこらの御すゑ〳〵にありがたかりけり

・弄云・光君嵯峨ノ院に隠居し給て二三年後終^ニ

昇^ニ退し給ことをいへり・〳〵かの御かけにたち

つぎ給べき人・そこらの御すゑ〳〵に有がたかりけるとハ

・花云・源氏の君の・容儀才能心操などにつけて立^{ツキ}継^{ツキ}給

「四九才

7 幻卷竹東三常静―何卷穂国万書九青白

8 嵯峨ノ院ニモ竹東三常静―嵯峨院モ穂

国万書―嵯峨ノ院モ書九白

9 人ノ心竹穂国万書三常九静青白―人ハ

東

10 同前也竹東三常静―同也穂国万書九青

白

11 御かけに竹三常―御かけに穂国万書東

九静青白

※「〳〵」に濁点。

<p>・匂宮ト薫トノ事 ヲ・可レ書タメ也</p>	<p>・上皇ト申モ・同 事也</p> <p>・御位ヲ被レ去 テ御出家ナキ也</p> <p>・ヲリ居ノ帝ト申 ハ・御位ヲ被レ去 テ御出家ナキ也</p>
<p>はせざるべし</p> <p>・共ニ六条ノ院にておひ出給へる也・三ノ宮ハ源氏の御孫</p> <p>「四九ウ</p>	<p>・冷泉院ノ御事也</p> <p>・一 おり居のみかどをかけたてまつらんはかたじけなし</p> <p>・これハ又源氏の御子なれども密通なれば・これを申さん はかたじけなしとなり</p> <p>・当代也</p> <p>・一 たうだいの三宮そのおなじおとにておひいで給 し・宮のわか君と・このふた所なむとりくに きよなるる御名とり給て・けにいとなべてならぬ</p> <p>・同殿の内といふ心也</p> <p>・いみじきもの、ふ・あたたき成とも・みてはうちままれぬべき・さまのし給へればと・源氏ノ御事をバ書・薫を バ・いとまばゆききハにハ・おはせざるべしとあれバ・源氏程ニハ・ナキ事ヲ云也</p> <p>御ありさまどもなれど・いとまばゆき、はにハお</p> <p>・マハユキト云ハ・日ヲモ見合セラレヌ程ノ事ヲ云也</p> <p>・花云・三宮ハ匂君也・宮の若君ハ</p> <p>かほるなり・二品ノ宮の御後なるにて・宮の若君といへり</p>

※「君」「く」に濁点。

- 12 三ノ宮竹東三静―三ノ宮穂国万書九青
白―三宮常
13 いと竹東三常静―(ナシ) 穂国万書九
青白

- 14 し給へれハと竹東三常静―し給つれハ
穂国万書九白―(行間注全体ナシ) 青
15 まはゆき、はにハ竹東三常九静―まは
ゆき。(きはには) 穂―まはゆき国万書白
(いみじき……ヲ云也) ナシ) 青

・源氏二立並給ト也

・我辛勞モセスジテ親ナドノヨケイヲ以テ・先身ヲタモツヲ・我威光ト思事惡ナリ・其父ノ光ノ余リニテノ故也一端ハサアルトモ・兎角シタラバ・闕目ミユル者也・其境ヲヨク／＼分別シテ・国ヲモ家ヲモ・タモツ事・真実其人ノ器用ノアラハル・事也

宮の若君ハ御まゝ、子なれども・系図には御子のつらに・書のせはへるなり云々・まばゆき、ハにはおはせざるべしとハ・弄云・よきにもすぐれたる事也云々

・同匂宮・兵宮ノ事也 常ノ人ノ可然ト也

・一 たゞよのつねの人さまにめでたくあてになまめかしくおはするをもと、して・さる御なからひに・人のおもひ聞えたるもてなしありさまも・いにしへの御ひゞきはひよりも・やゝたちまさり給へる

柄也 爰カ肝要ノ詞也

御おほえからなむ・かたへはこよなういつくしかりける

・聞書 これハ源氏の一段おほえの御座ありつるによて・其御子孫

なれはすぐれたるとなり桐壺御門の御時源氏の君を御

崇敬よりハマさりたるといへり云々

・一 むらさきのうへの御心よせことにはぐゝみ聞え給し

・匂宮也

・当代今上第一御子ナレハ朱雀院ノ

ゆへ・三宮ハ二条院におはします・春宮をばさる

爰ヨリ系図転シノスル所也

御為ニハ・孫ニテマシマス也・明石中宮ノ・御腹也

「五〇オ

16 兵宮ノ事也竹東三常―兵部ノ宮ノ事也
穂万書九青―兵部卿宮ノ事也静―兵部卿ノ宮ノ事也国白

17 常ノ人竹東三常静―□ノ人穂―宮ノ人

国万書九白―(ナシ) 青

18 親ナトノ竹東三常静―親トノ穂国万書

九青白

19 御おほえ竹国万書東三常静白―(御)

おほえ穂九―おほえ青

20 惡ナリ竹書東常静白―惡キノ穂国万三

九青

21 光ノ余リニテノ竹東三常静―光ノ余ニ

テノ穂書白―光御余ニテノ国万九―光ノ御

余ニテノ青

22 闕目ミユル者也竹三常静―(ナシ) 穂

国万書九青白―闕目ミユル者也東

23 アラハル、竹国万書東三常九静青白―

アラハル(ル) 穂

24 孫竹国万書東三常九静白―□(御孫)

穂―(当代……御腹也) 注ナシ) 青

<p>／＼カナシウト云心 ハ・一段トフビン ニスル事也・大慈 大悲ノ心也・愛子 ナドノ悪キ事ヲ モ・親ノ目ニ不 見知・ヒリ／＼ トスルヤウ也 ・女二宮ノ御座ア レバ初ノヲ女一宮 ト申也</p>	<p>・今上當帝也 さるやむごとなきものにをきたてまつり給て・みかど ・明石中宮也 きささいミじうかなしうしたてまつりかしづき・こ ・匂宮を愛子なれば也 えさせ給宮なれば。 （うちすみをせさせたてまつり給へと） ・二条ノ院の事也 ・心をいやすき故郷にすみよく し給なりけり・御げむぶくし給てハ・兵部卿の宮 と聞ゆ・女一の宮ハ六条院のみなミのまちのひむがしの 世也 たいを・そのよの御しつらひあらためずおはしまして あさ夕に恋しのびきこえ給 ・六条ノ院・南の町ハ・紫上の住給シ 方なれハ・女一ノ宮そのまゝ・そこに御座也 ・匂宮ノ兄宮也 同腹也 ・二宮もおなじおとゞのしん殿を・とき／＼の御やすミ 所にし給て・梅つばを御ざうしにし給て・右のおほ い殿の・中ひめ君をえたてまつり給へり ・右ノお、い殿ハ・夕霧也 ・此中姫君を向へ給也 ・一つぎの坊がねにていとおぼえことにおも／＼しう 「五〇ウ ・式部卿宮ノ事也・匂宮ニテ可然ト也</p>
--	---

- 25 （うちすみをせさせたてまつり給へと）竹（ナシ）穂国万書九青白―うちすみをせさせたてまつり給へと東三常静
- 26 常陸ト也竹万東三常静青―常陸下（次）也穂―常陸下也国書九白
- ※「／＼」に濁点。
- 27 御（ルビ）「ミ」「ヲン」さうし竹静―御（ルビ）「ミ」「ヲ、ン」さうし三常―御さうし穂国万書東九青白
- 28 中姫君を竹東三常青―中姫君（を）穂―中姫君と国万書九静白
- 29 兼也竹国万書東三常九静白―兼也后かねなど云かことし穂青

・漢ノ心ニテハ・
清也・仮名ノ時ハ
濁ル・聞ヨキ也
・東宮ヘモ・二宮
ヘモ・夕霧ノ御女
ヲ被レ参タル事ナ
レバ・此次ニ勾宮
ヘモ一向ニ可_レ参
事ナルト・世ニ
モ申・中宮も思召
スト也
・御覽ジテ御心ニ
合タルヲト思召ト
チャト・色メヒ
タル御心ヲ書也
・終ニ夕霧ノ聲ニ
成給也

人がらもすくよかになむ物し給ける

・坊兼とハ東宮にたち給べき御しだちと云事也
・后がね聲がねなど云同之

・夕霧ノ事也

一 大い殿の御むすめハ・いとあまたものし給大姫

君ハ東宮にまいり給て・またきしろふ

・同夕霧ノ御子たち也

人なきさまにてさぶらひ給・そのつきくなを
みなついでのみ・にこそはと・世の人もおもひき

・秋好中宮ノ事也

・閑書

こえ・きさいの宮もの給ハすれど 夕霧の御女

嫡女也

・式部卿ノ御事也

・大ひめ君ハ東宮へまいり給・中のハ二宮へまいり給
・其次なり云々 春宮ノ御連枝也

・勾宮也

タイ

一 この兵部卿の宮ハさしもおぼしたらず・我御心

よりおこらざらんことなどハ・すさまじくもおぼし

ぬべき御けしきなめり・弄云・勾宮也・十五六才にや・夕霧

の息女にの事也云々

※「く」に清濁両様の声点。

※「君」に濁点。

30 嫡女也竹東三常静―(ナシ) 穂国万書

九青白

31 おぼしたら(タイ) す竹東三常静―お
ほした、す穂国万書九青白

32 色メヒタル竹三常―色メイタル穂国書

東九静青白―色スイタル万

「五一オ

<p>・同様ノ物と云心也</p> <p>・九条右丞相師輔公ノ御女ヲ村上ノ后・安子・澄明親王へ登子・高明公・御連枝三人へ被_レ参也下心含テ書也</p>	<p>・宿木ニ・終六君・匂宮へ迎へ給也</p>
<p>・同様ノ物と云事也・大姫君ハ東宮へ・二ノ宮へも中姫君を被_レ参又匂宮へもとあれ</p> <p>・夕霧也</p> <p>・一 おとゞもなにかは・やうのものとさのみうるはしう</p> <p>・匂宮ノ事也</p> <p>はとしづめ給へど・又さる御けしきあらんをバ</p> <p>もてはなれてもあるまじうおもむけて・いと</p> <p>我姫君を也</p> <p>いたうかしづき聞え給</p> <p>・夕霧の心に・御所望ならは姫君をまいらせうすると也</p> <p>・夕霧ノ女・藤内侍ノ腹也・宿木ノ卷二匂宮ノ北方ニ成給へる也云々</p> <p>・一 六の君なむ・そのころのすこし我ハとおもひのぼり給へる・御子たちかむだちめの・御心つくすくさはひに物し給ける・此藤内侍腹の姫君に・みな心をつくさるゝ也</p> <p>・六条ノ院ノ事</p> <p>・一 さま_イくつどひ給へりし御かた_イくなくくつゐに</p> <p>おはすべきすみかどもに・ミ_イな_イをのくうつろひ給しに・花ちるさと・聞えしハ・ひむがしの院をぞ・御そふどころにてわたり給にける・聞書・六条ノ院の人々の事也・召仕はれたる人々・ミ_イな_イ散くになりたる事を云なり」五一ウ</p>	

33 御三人へハト也竹東三常静―御三人ハト也穂国万書九青白

34 安子竹三常静―禾子穂万青白―女子東―季国書九

35 我姫君を也竹東三常静―(ナシ) 穂国万書九青白

36 ミ_イな_イ竹東常―みな穂国万書九青白
ミ_イな_イ三―みな(傍書「イ」) 静

※「共」「く」に濁点。

・秋好中宮ヲマダ
・后ト申ニ依テ・
紛ラカスマジキ為
ニ・今后ト書也

・移リ替ル世間ノ
軀ハ・漢家本朝共
ニ同事也・華清宮
ナドモ〳都入ニ長
楊作〳両声ナド
アルヤウニ・皆此
分也・爰ハ融公ノ
事ヲ含テ書也・ト
ホル公ヲ・六条殿
ト・申タルト也・
源氏ヲハ六条院ト
申也・六条融公ノ
跡ノ・荒タル事・
歌連歌ニモスル所
也

・花散里ハ・六条ノ院のうちの・ひむがしの院を・御所分とさ
だめられてすゝ給也・〳御そふ所と云・御所分とあるも同事也

・女三ノ宮

・明石中宮ノ事

一 入道宮ハ三条の宮におはします・いま后ハ内に

・六条ノ院ノ内ノ事也

のミさぶらひ給へバ・院のうちにさびしく人ずくな

・夕霧也

・同夕霧ノ詞也

に成にけるを・右のおとゝ人のうへにていにし

へのためしを見聞にも・いけるかざりのよに心を

とめてつくりしめたる人の・いゑ居の名残なく

ならひイ

うちすてられて・世の名残もつねなく見ゆるハ・いと

あはれにはかなさしらるゝを・聞書・三条ノ宮ハ朱雀院より

女三ノ宮へ被参所也・たゞ中宮といへバ秋好中宮にまざる・

によて・明石中宮を爰にて后と書也・親の心を尽て作り置

たる所を荒スハ見にくき物と也・六条ノ院を随分荒さぬ様にと夕霧ノ

詞也

・同夕霧詞也

一 我世にあらむかぎりだにこの院あらさず

・六条ノ院の事也

「五二オ

※「所」に濁点。

37 御所分とさためられて竹常―御所分にと
と。(さ)ためられて穂

―御所分にとさためられて青

―御所分にとさためられて国万丸

―御所分にとさためられて東三

―御所分とと(傍書「さ敷」)ためられて静

―御所分にと。(私さ敷)ためられて書白

38 名残(傍書「ならひイ」) 竹常静

―名残穂国万書東九青白―名残(傍書「な

らひイ」) 三

39 よて竹東三常静―よりに穂国万書九青

白

<p>可_レ知也</p> <p>タメト・アルニテ</p>	<p>・三条宮ト三条殿 ト・各別也可_二見 分也</p> <p>・只此結構ヲツク サレタル・六条院 ハ・明石上一人ノ 為ニ成タル也・明 石姫君ヲ嫁テ・悉 ナミ居ラレタル也 ・殊ユクスエノ春 宮マデノ事也</p> <p>・是ヲ明石中宮ノ 御事ト云説アリ悪 也然バ御ノ字可_レ 入也 ヽヒトリノ</p>
<p>二ノ宮もおなじ寢殿にすみ給なり云々</p>	<p>・大路也六条院作ラレテヨリ・三十年ノ内也・世間ノ移行事如「雷光」也 ほとりのおほちなど人かげかれはつまじうと おぼしの給はせて・うしとらのまちにかの 落葉宮ノ事也</p> <p>一条院の宮をわたしたてまつり給てなむ 雲居雁ノ事也 ・夕霧ノ実法ナル人モ如此ト也</p> <p>・三条殿と夜ごとに十五日づゝうるはしうか よひすみ給ける ・夕霧ノ大臣ノ雲居ノ雁と落葉ノ宮とへ ・十五日づゝ、かよひすみ給となり</p> <p>・ 二条院とてつくりみがき六条院の春のおと どゝて世にのゝしり玉のうてなもたゞひと りのすゑのためなりけりとみえて・あかしの御 かたハあまたの宮たちの御うしろミをしつゝ あつかひ聞え給へり ・花云・明石中宮の事也・匂宮ハ ・二条ノ院に住給女一ノ宮ハ・六条院の春のおとゝに住給ひ</p>

・尺尊・四生捨ニ一子ニ・卵生・胎生シツケ・湿生・化生シツケ・此四ニハヅレテ生ル者ハナキ者也・是ヲモ・我一子ノゴトクニ思ト釈尊ノ心也・皆如何トモシテ仏道ニ入ント也

・湿生ハバウ振虫ナト云物ノ事也・皆生ヲ請テ・來ル者ノ事也

・史記云
左右ニ

・夕霧ノ事也

・一 大い殿ハいづかたの御事をも・むかしの御心をきてのまゝに・あらためかはることなく・あまねき生ヲ受テ來ル者ハ・人間ノ事ハ不_レ及申 畜類虫マデモ・如一子_ニ思ト也

紫上ノ事也

おや心につかうまつり給にも・たいのうへのかやうにてとまり給へらましかばいかばかり心をつくして・つかうまつりみえたてまつらまし

花散里の如クニ紫上存命ならハと也

・何事も源氏の御時に聊もかハラずし給となり
紫上のゐ給ハゞさこそ心をつくし給はんと也

・同夕霧心也

・一 つゐにいさゝかもとりわきて我心よせと・見しり給へきふしもなくてすぎ給ひにし
ことをくちおしう・あかづかなしうおもひいできこえ給ふ

・是も畢竟
紫上ノ事也

・天下ノ人也
・源氏ノ御事也

・あめのしたの人 院をこ

ひ聞えぬなく・とにかくにつけても世ハたゞ火を
・雲隠ノ事ヲ謂_スネドモ・ソロリ／＼ト・聞ユル也

「五三オ

42 とにかくに竹国東常九静青——とか
(に) かくに穂三——とかにかくに万書白

40 卵生・胎生タマ・湿生シツ・化生ケ竹東三常静——
卵生・胎生・湿生・化生穂国万書九青白

41 是ヲモ竹東三常静——是ヲモへ穂国万九青——是ヲモ一書白

<p>・河云・法華經 云・仏此夜滅度・ 如薪尽火滅・此 心に叶へり</p>	<p>・舌／イサ桜我 モチリナン一サカ リアリナバ人ニウ キメミヘナン</p>	<p>・紫上ノはやく果 給たるによりて・ 猶おほしまさると 也</p>
<p>けちたるやうに・なにごとくもはえなきなげ きをせぬおりなかりけり <small>・天下の人・源氏を悉く聞ゆる ことを云なり</small></p>	<p>・人々ノ事也・重ヲ立テ云也 一 まして殿のうちの人々御かた〔 〕宮たちなど ハさらにも聞えずかぎりなき御ことをバさる 物にて・またかのむらさきの御ありさまを 心にしめず・よろづのことにつけておもひいで 聞え給はぬ時のまなし・源氏の御事バ申に及はず其二 次でハ・紫上宮タチの御事を想聞ゆる也</p>	<p>引古／残りなくちるそめてたきくら花ありて世中はてのうければ・是ヨキ也 一 春の花のさかりは・げになが、らぬにしも ・引歌古今／ちればこそいと、桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき ・薫ノ事也 おほえまさる物となむ・二品の宮のわか〔 〕君は ・女三宮ノ御事也 ・源氏ノ御事也 レ ゼイイントヨムヘシ ・院の聞えつけ給へりしまゝに・れいぜん院の ・秋好中宮也 御門・とりわきておほしかしづき・さいの宮 「五三ウ」</p>

43 如薪尽火滅竹国三常書九静白―如薪尽
火（滅）穂万青―如 新尽火滅東

44 心にしめず（つ）竹三―心にしめず
（傍書「つ、イ」）穂―心にしめて（傍書
「リイ」）国九―心にしめつ、東常静青―心
にしめて（傍書「つ、イ」）万書白

45 古竹東三常静―（ナシ）穂国万書九青
白

※「く」「君」に濁点。

・侍従カラ・中将
 二超越ノ事・粟田
 関白ノ例也・年ノ
 内ニ昇進ハ・宇治
 関白ノ例也・撰家
 今マデ其分也
 法興院加階ノ初メ
 也年官年爵也加階
 也・太上天皇准后
 モ昔ハ叙爵也・今
 ハ加階也・除目ト
 云是也
 ・我モくト上衆
 ラ望時コソアレカ
 ホルニ対シメハ・
 争人モナキニ・昇
 進ヲ被レ急ルト
 也・十四ニテ元服
 臣下無ニ其例・薰
 ラ臣下カト思ヘバ
 又如レ此也
 ・聞書・上衆ヲ闕
 テ昇進也・薰昇進
 指合ナキヲ・急テ
 昇進ヲセントテ也

・御子たちも無御座也・かはるを頼ミ聞え給と也
 も・御子たちなどおはせず心ほそうおぼさ
 る、まゝに・うれしき御うしろミに・まめやかに
 たのミ聞え給へり・御元ぶくなども院に
 てせさせ給
 ・薰ハ六条ノ院にて・御元服し給也
 ・さるによりて・薰ノ巻共いはんかと也
 ・十四にて二一
 ・同薰ノ事也
 ・花鳥ニ悪ク御覽シタル也
 キ
 月に侍従になり給・秋右近中将になりて
 御給也
 御たうばりのかゝいなどをさへ・いづこの心もと
 なきにか・いそぎくはへておとなびさせ給
 ・弄云 中将とかきて・又両年をへて後の巻に・侍従くどあり・不
 審未決也・一義中将ニ成たるをいひつけたるまゝに侍従
 とはいふ歟・別に注あり
 ・花鳥三年後と云々・竹河侍従に
 つきての義歟云々
 ・聞書・花鳥ノ説年忌相違此等よりの事歟云々
 ・殿也
 ・局也
 ・おはしますおとづちかきたいを・さうしにしつ
 ・仙洞ニテノ事也・御座アル・殿を臺也
 ・薰の曹司也

一五四才

46 御座竹国万書東三常九静青白一。(御座穗

47 ま、(傍書「イ」に竹常一ま、に穂国万書東九静青白一ま、(傍書「イ」に三

※「分」に濁点。

48 花鳥ニ悪ク御覽シタル也竹東三常静一(ナシ)穂国万書九青白

49 殿也竹東三常静一殿也穂国万書九青白

・冷・帝ノ御覧シ斗て也

らひなどみづから御覧じいれて・わかき人
もわらはしもづかへまで・すぐれたるをえり

と、のへ・女の御ぎしきよりも・まばゆくと、

・冷泉院ノ御事也・秋好中宮ノ事也

のへさせ給へり・うへにも 宮にもさぶらふ女房の
中にも・かたちよくあてやかにめやすきハ・ミナ

六条ノ院也

うつしわたさせ給つ、・院のうちを心につけて

たい

すみよくありよくおもふべくとのミ・わざとがまし

・柏木ノ父大臣ノ事也

き御あつかひぐさにおほされ給へり・故ちじの

・柏木ノ連枝コウキ殿ノ女御ノ事也

・冷ノ皇女也

おほい殿の女御と聞えし御はらに・女宮たゞひ
と、ころおはしけるをなむ・かぎりなくかしづ

き給・御ありさまにをとらず・きさいの宮の御

「五四ウ

50 御きしき竹国万書東三常九静白―御書

(け) しき穂―御けしき青

51 すみよ (傍書「たい」) く竹東常静―

すみよく穂国万書三九青白

・是程ニハ余リナルト・皆申也

・一度ハ柏木ノ為・一度ハ源氏ノ御為ナルベシ

おぼえのとし月にまさり給けはひにこそハ・
などかさしもと見るまでなむ

・聞書、故致仕の太殿の女御と聞えしと云は、柏木ノ妹・冷泉院へ参て弘徽殿と聞ゆる也・此御腹ニハ女（一ノ）宮一人也

・その女一ノ宮を・冷泉院のかしづき給にをもとらず・秋好中宮の薫をもてなし給事を・／＼などかさしもとまで

人のミたてまつるといへるなり・これを
・聞書
花鳥ニハ

・秋好中宮の御おぼえの・年月にまさり給にくらぶれば・薫の覚えハさしもなきと思はるゝと御覧じたる也
・これハすこし相違歟云々

・女三ノ宮也・薫ノ母宮ト謂ハン為也

・一 母宮ハいまハたゞ御おこなひをしづかに

（ことば）

し給て・月。の御念仏としにふたゝびの

御八講・おり／＼のたうとき御いとナミばかり

「五五才

52 女（一ノ）宮竹一ノ女二ノ宮穂国万書
九青白一ノ女宮東三静一ノ女一ノ宮常

53 母宮竹国万書東三常九静青白一ノ母
（宮）穂

54 月（ことば）の竹一月に二た
ひ（一ノ）穂一月に二たひの国万書九青白
一月ことの三常静一月にふたゝびの（こと
の）東

55 御竹東三常一御穂国万書九静青白

56 御為竹東三常静一引為穂国万九青一引
（傍書「御賦」為書白

・薫を結句親ノや
うに思給て・頼も
敷思召也

・総別女三ノ宮ハチト無分所ノアル御人也

をし給て・つれくにおはしませば・此君の

・母女三ノ宮ノ御心也

いでいり給を・かへりておやのやうにたのも

・冷泉院也

しきかげにおほしたれば・いとあはれにて院

・両御門にも也

にも内にもめしまつハし・春宮もつぎく

・式部卿・兵部卿・皆明石中宮ノ御腹也・常陸宮ハ別腹也

の宮たちも・なつかしき御あそびがたきにて

・薫ノ心也

ともなひ給へば・いとまなくゝるしくいかでみ

・我身を分度と也

をわけてしがなとおほえ給ける

・あなたこなたへ引
つらること也

引歌・伊勢物語

／おもへども身をしわけねハめにみえぬ心を君にたぐへてぞやる

・薫ノ心也

・一 おさな心ちにはの聞給しことの・おりくいぶかし

くイ

うおぼつかなうおもひわたれどとふべき人も

なし・聞書 我ハ柏木の子なると・人のいふよしほのき、給へども

たれに問はん人もなければとなり

「五五ウ

・惣別源氏一部
ニアル・世ト友
ハ・皆世ノ字也
・夜ニ通事歌ニハ
嫌事也・ゼンケウ
太子ト云事不知事
也・クイ太子ニテ
ヨク聞エタル事也
・七陀太子三姫・
瞿夷姫・鹿野姫・耶
修多羅姫・此三人也
・^{クイ}荊
・那修多羅ハ我ハ
懷妊シタルト被_レ知
タル也・釈尊ノ六
年ノ間・供敬セラ
ル・間タン生ラマ
タレタルト也・羅
云ハ七才タルベ
シ・是瞿夷太子也・
釈尊羅漢ノ内ニ交
リテ居給フ・此太子
ノ百味ノ中ノ檀供ヲ
持テ・直ニ釈尊ノ御
前へ被_レ向タル也・
サテハ釈尊ノ御子
ト被_レ知タル事也

・同黨の心也

・

宮にはことのけしきにても・しりけりとお

ぼされむかたはらいたきすぢなれば・世と、

もの心にかけて・いかなりけることにかハ・なにの

ちぎりにて・かうやすからぬおもひそひたる

身にしもなりいでけむ ・母女三ノ宮へハ・かう我思との気色

をもしられ奉てハ・^{クイ}片腹痛ト也

・

せんけう^{クイ}太子の我身にとひけむ・さとりをも

えてしがなとぞ・ひとりごたれ給ひける

聞書・河海にハ・くい太子とあり・青表紙ハせんげう太子云々

瞿夷・善巧同シ名歟・那修多羅之同位瞿夷也・羅睺羅

生・時之事見_レ河海_一 又花鳥ニ法花会上に至てニ乗成

覚のさとりをひらきて・未来の記^キヲをさづけ給し時

・我為太子時・羅睺為長子・我今成仏道・受法為御子と

・偈を説給へるにて・仏の御子とハ定まれる事を・我身ニとひ

「五六オ

57 片腹痛竹国書東三九静白―引腹痛穂万
青―かたはらいたき常

58 せんけう(傍書「クイ」)太子竹東三
常静―せんけう太子穂万書青白―せんけう

太子国九

59 瞿夷也竹国万書東三常九静白―瞿夷

(女)也穂―瞿夷女也青

60 荊(傍書「カイ」「カル」)竹東常―荊

(傍書「カイ」)穂国三書九静青白―荊万

61 荊(傍書「カイ」)竹三常静―荊(傍

書「カイ」「カル」)東―荊穂国万九青―荊

(傍書「別歟」)書白

・所詮薫ノ心に覺
て知度と也

・薫ノ歌ノ心ハ・
無始無終ト也・其
前ハ何物ゾト云・

其道理ヲ・薫ノ
思テ・タ・我ハ
一切衆生ト同前ト

也

ウマレ行々ユイテ

／生々々々／生ノ
初シニ聞ラン／行
々々々々／死ノ終
聞_{リニ}

けるさとりといへるにや云々・くい太子と云もせんげう
太子といふも・羅睺羅の事なれば同事也・我身に問とある
猶以不審也可尋之云々・弄花説同之

・薫

／おほつかな誰に問ましいかにして始もはても知ぬ
我ミぞ

・同薫ノ心也

・一 いらふべき人もなし・ことにふれて我身につゝ、があ
る心ちするもたゞならず・物なげかしくのミ

・女三ノ宮ノ事也

おもひめぐらしつゝ・宮もかくさかりの御かたちを
やつし給て・なにばかりの御道心にてか・には
かにおもむき給けむ

・聞書 恙_ズとハ虫の名也・人の臟
を食破也・よき事をつゝ、がなきといふ也・物おもひの時をつゝ、

があると云なり・女三ノ若キ御道心ハ・何ゾ可有子細ト・薫

モ被_レ思也

・同薫ノ心也

・一 かくおもはず成けることのミだれにかならずう

・同女三ノ宮ノ事也

しとおぼしなるふしありけむ人も・まさ

「五六ウ

62 薫ノ思テ竹東三常靜―薫ノウマレ思テ
徳国万書九青白

63 ウマレ行々ユイテ竹三靜―行々ユイテ
徳国万書九青白―ウマレ行也ユイテ東―ム
マレ行々ユイテ常

<p>ク相也</p> <p>二那修多羅ノ事ヨ</p> <p>ダケハ浅間也・爰</p> <p>シノ院ナド多書也</p> <p>ノ何カシノ嶽何ガ</p> <p>デ也</p>	<p>／＼</p> <p>・河云・穩ヲホド</p> <p>キ</p> <p>ノ女ノ御身ニテト</p> <p>ハ・面ハ行ヲシ給</p> <p>トモ・一段ノ事ハ</p> <p>如何ト・聞エタル</p> <p>也・下心ハ・那修</p> <p>多羅比丘ノ事ヲ含</p>
<p>」五七オ</p>	<p>にもりいでしらじやハ・猶つゝむべきことの</p> <p>聞えにより・我にはけしきをしらする人</p> <p>・ひけるイ・女三ノ宮ノ御事也</p> <p>のなきなめりとおもふ・あけくれつとめ給やう</p> <p>・大振ノ妹也</p> <p>なめれどはかもなくおほどき給へる女の</p> <p>御さとのほどこに・／＼はちすの露もあきらかに</p> <p>・玉とみがき給はむこともかたし</p> <p>・古今・引歌</p> <p>／＼運葉のにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく</p> <p>・此歌叶へり云々</p> <p>・同薫心也</p> <p>・一／＼いつゝのながしもなをうしろめたきを・われ</p> <p>たすけてイ</p> <p>この御心ちを・おなじうハ・のちのよをだにとおもふ</p> <p>・問書・女の五障の事也</p> <p>・女人身猶有五障云々</p> <p>・法華經</p> <p>・一者不得作梵天王</p> <p>・二者帝釈</p> <p>・三者魔王</p> <p>・四者天輪聖王</p> <p>・五者仏身</p> <p>・女三ノ宮ノ後ノ世ヲ思ふと也</p>

	<p>・同薫ノ心也 <small>・ 柏木ノ事也、もえん煙の結は、れノ事也</small></p> <p>・ かのすぎ給にけむも・やすからぬおもひにむすばゝれてやなどをしはかるに・世をかへ <small>・ 出家しても、柏木に後ノ世に対面も有度と也</small></p> <p>・ てもたいめむせまほしき心つきて・元<small>ケシ</small>ぶくは物うがり給ひけれどすまひはてず・をのづから世中にもてなされて・まはゆきまではなやかなる御身のかざりも心につかず <small>てイ</small></p> <p>・ のミ・おもひしづまり給へり <small>・ 祝言も心につかぬやうに 思ながらしづまり給也</small></p> <p>・ 一 <small>・ 内裏 ・ 女三ノ宮也</small> うちにも母宮の御かたざまの御心よせふかくて <small>・ 明石ノ中宮也</small></p> <p>・ いとあはれなる物におぼされ・きさいの宮 <small>・ 一ツノ殿ニテ也</small> はたもとよりひとつおとゞにて・宮たちの もろともにおひいであそび給し御もてなし</p> <p>「五七ウ</p>
--	--

64 思なから竹国万書東三常九静青白―思
 な（か）ら穂

殆也

おさくあらため給はず

聞書、内にも母宮の御かたさまの御心のよせふかくとハ・内にも

とハ今上の御事也・女三宮の御ことを・父御門朱雀院の御

をかれし事也・朱雀院の勅定ハ今上のいまだ東宮の御時の事なり

・薰ハ・末子也・

爰ノ始末雲隠ノ卷

ニアルト可「心得」

也

・桐壺ニ「琴笛ノ

音ニモ雲井ヲ響カ

シナド一向御幼稚

ノ時ノ事ヲ書「早

昔ノ光源氏ト書所

光陰ノ移ル所可「

分別」也

・薰ノ詞也

・一　すゑにむまれ給て心ぐるしうおとなしうも

えミをかぬことく・院のおほしの給しをおもひ

いで聞え給つゝ・おろかならず思ひ聞え給へり

・源氏の被仰たる事を・薰のいま思ひいで給事也

・夕霧也

・一　右のおとゞも我御子ども^{ヲ、ン}の君たちよりも・この

君をばこまやかにやむごとなくもてなしかし

づきたてまつり給　・薰を一段と重宝し給と也

・草子地也

・一　むかしひかるきみと聞えしは・さるまたなき

弄云・幻巻・源氏の末に・薰ハ五歳也・今十四歳也云々

「五八オ

<p>・須磨ノ左遷ナドノ事ナルヘシ・帰京モ有タラバ弘徽殿ヘ・報ナドヲモ・シ給ハント思召サバ世ノ乱ニモ成ベキヲ・チトモ其御心モナウテ結局後ノ世ノ事マデノ・タウトキ事ヲシ給也</p> <p>・前ニアルノ右ノヲト・モ我御子共ノ君ダチヨリモ・トアルニ・合テミル所也</p>	<p>・悪后ノ事をいへり</p> <p>御おぼえながら・そねみ給人うちそひ・はゝかたの御うしろミなくななどありしに・御こゝろ</p> <p>ナダラカナル事也</p> <p>ざまも物ぶかく・世中をおぼしなだらめしほどにならびなき御ひかりをまばゆからずも</p> <p>てしづめ給ひ・つゐにさるいミじき世のミだれもいできぬべかりしことをも・ことなくすぐし給て・のちの世の御つとめををくらかし給</p> <p>無懈怠也</p> <p>はす</p> <p>・源氏暗職の毎月の念仏の事なり</p> <p>・よろづさりげなくて久</p> <p>しくのどけき御心をきてにこそありしが</p> <p>・薫ノ事也</p> <p>・この君ハまだしきに世のおぼえいとすぎて</p> <p>・源氏ヨリハト也</p> <p>・おもひあがりたること・こよなくなどぞ物し給</p> <p>・同東宮を初て・事外の崇敬なり云々</p> <p>「五八ウ</p>
--	--

・百歩ノ香

げにさるべくていとこの世の人とはつくりいで

ざりける・かりにやどれるかとも見ゆること

そひ給へり

・薫の林ハ人間とハみえず
化身かとなり

・同薫ノ事也
・かほかたちも

そこはかと・いづこなむすぐれたる・あなき

・権化ナラバ・何トゾ・一廉ミユル所モ・有ベキカ・又サモナキ也

よらと見ゆるところもなきが・たゞいとなま

めかしうはづかしげに・心のおくおほかりげなる

けはひの人に、ぬ成けり・かうばしさをこの

世のにはひならずあやしきまでうちふるま

ひ給へるあたりとをくへだゝるほどのおいかげ

に・まことに百ぶのほかもかほりぬべき心ちしける

・聞書　・薫ハ惣して香ばしき也・仏の八十の相号の内・四

十二の相号に毛穴よりも香ばしく匂也・聖徳太子も

「五九才

65 かうはしさそ竹国万書東常九静白―

(。香の) かうはしさそ穂三―香のかうは

しさそ青

<p>・歩ト云ハ唐ニハ・六尺ヲ歩トスル也・日本ハ五尺ト云々・今ノ世ハ一間三足也十間ガ三十歩也令ヲ以テ云時ハ十二丁ガ百歩也</p> <p>・是ハ禁中ナドヘ・出入ヲモセウズル人ノ事也</p> <p>・唐櫃<small>カラヅ</small></p> <p>・薰衣香ヲ・今ノ世ニハ・夏バカリノ物ノヤウニスル也・大ギナル袋ニ入テ・唐櫃ヘ入テ置也・キヌニ下留<small>ト</small>ニナル也・其上ニ別ニ勾ヲスル也</p>	<p>・一</p> <p>たれもさばかりになりぬる御ありさまのいと</p> <p>やつれはミ・たゝありなるやハあるべき・さま<small>く</small>に</p> <p>・只有ツ、ケテヨム也</p> <p>われ人にまさらむとつくるひよういすべかめるを かくかたわなるまでうちしのびたちよらむ物の くまもしるき・ほのめきのかくれあるまじきに</p> <p>・我御身の句を・薰ハ結句うるさがり給也 ・弄云不<small>二</small>自粧也云々・袖句ナドノ事也</p> <p>うるさがりて・おさ<small>く</small>とりもつけ給はねど・あまたの御からひつにうづもれたるかうのかどもの・此</p> <p>薰也</p> <p>君のはいふよしもなきにほひをくはへ</p> <p>・物のかくれもしるく・木の間の月のほのめきたるごとく・薰の立より給へる所ハ・露にてもしらざる人あるまじき心也</p> <p>云々</p> <p>「五九ウ</p>
---	---

・自然のかうばしきにうるさがり給と也

・薫ノ居給御まへ也

・一 おまへの花の木もはかなくそでかけ給ふ

・梅ニハ無執心

・薫へ立寄タキト

也

人おほく ・薫の事也・袖かけ給と也

引ノ匂フ香ノ君ヲモホユル花ナレバヲレルシツクニ袖ゾヌレヌル・伊勢六帖・此引歌

・引歌・花云ノ色よりも香こそ哀に思はゆれ誰袖ふれし宿の梅ぞも

奇特也

・白楽天

ノ前頭 更有薫

條物・老菊衰蘭・

両三叢

・一 秋の野にぬしなき藤ばかまもよとのかほり

ハかくれて・なつかしきおひ風・ことにおりなし

からなむまさりける ・薫の折給つる・折なし栖なると也

・引歌・古今ノ主しらぬ香こそ匂へれ秋の、にたがぬれかけし藤袴ぞも

薫ノ事也

・一 かくあやしきまで人のとがむる香にしミ給へ

るを・兵部卿の宮なむ・ことくよりもいどま

・古今ノ引歌ノ梅花立よるばかり有しより人のとがむるかけぞしミける

・是ハ梅花ナルヲ・菊ニトリナシタル也

「六〇才

67 奇特也竹書東三常靜白―奇特也穂国万

九青

68 誰袖竹国万書東三常靜白―袖穂―誰九

青

※「色よりも…梅ぞも」物語本文と同じ
大きさで記す。

／ウツシ焼物ト云
ハ・薰衣香ノ事
也・エビ香ト云
モ・同者也・衣ヲ
入テ置唐櫃ニ平生
入テ置者也
・サテ其上ニ別ノ
匂ヲトムル也・只
ウツシト云モ・タ
キモノ也・薰ハ不
絶カヤウノヲ・焼
シメ給ト・匂宮
ノ・給也・シゼン
ノ匂アルト云事
ヲ・イドミ給也・
好色ライドマル・
ニテ・努々ナシ
・四季ノ焼物・春
ハ梅花・夏ハ荷
葉・秋ハ女郎花・
萩露・冬ニハ菊
花・残菊也・菊ヲ
秋ト心得ルハ違也

・薰ノ香をそねミ給て也・同兵部卿ノ宮詞也
しくおほして・それハわざとよろづのすぐ

・時々ニ焼しめ給と也

れたるうつしをしめ給ひ・あさ夕のことわざに
あはせいと なみ・おまへのせんざいにも春ハ梅の
花ぞのをながめ給ひ・春ハ梅花などを
たしめ給と也・秋はよの人
のめづるをみなへし・さをしかのつまにすめる

・鹿名草ト云也

・萩の露にもおさく御心うつし給はす・花ノ説

・聞書／御心うつし給はすの次の字を・花鳥にハすみて御

覧したる也・これは相違歟本の句にてハなし・たゞもてなし
の句ひなるを・本の句と御覧じ違たる也・すの字濁て

よむべし此心ハ・女郎花萩などの真実の句ひなき物

にハ・御心をうつし給はぬといふ心也・此心にて聞えたる也

引歌・六帖／皆人ノ老ヲ忘ルト云菊ハ百年ヲフル花ニゾ有ケル・

兵部卿ノ宮詞也・此菊ヲ今薫ト心得テハ悪也・菊ト云焼物ハ・大後ノ新作也

一 老をわする、きくにおとろへゆくふちはかま物

・引歌・花云／露ながら折てかぎ、む菊の花老せぬ秋の久しかるべく

「六〇ウ

69 いと なみ 竹東三常静——いと 穂国万書
九青白

70 聞書 竹東三常静——(ナシ) 穂国万書
青——花説白

※「す」に清濁両様の声点。

71 句 竹東三常——句 穂国万九青——句 白
書 静 白

72 違たる也 竹常青——違へたる也 穂国万書
九 静 白——違。(へ) たる也 東三

・菊ヨリモ匂物ヲ上ニ也・我モかう香と也・カヤウニ・アラフズル事ニテハ・ナキト也

げなきわれもかうなどはいとすさまじき・しもがれの比ほひまでおほしすてずなどわざとめきて・香にめづるおもひをなむたて、こ

薫ノ事を匂宮の、給也

のましよう おはしける

引歌 武蔵野の霜がれにみしわれもかう
あきしもをこる匂ひなりけり

・一 かゝるほどにすこしなよひやはらぎて・す

いたるかたにひかれ給へりと・世の人ハおもひ

きこえたり草子地也 ・ 早爰ニテモ・昔ノゲンジト書也・日月ノ立行事ヲ可思也
源氏ヲバ匂ヤ・薫ナドノ様ニ・立テ人ノ取扱事ナカツ、ル也・万徳円満ニテ・一色ト

・匂宮ノ御心ハ香ニメヅルト也・世上ノ人ハ香ニイドミ給トハ思ハヌ也

立タル事無之也

かくたて、そのこと、やうかはり・しみ給へ

(きか)

るかたぞなかり。し

源氏の君ハ薫にやうかハリて
よかりしと也

かほる也

・源中将

・匂宮へ也

この宮にハつねにまいりつ、御あそびなどに

・薫ノ芸ノ・スグレタル事聞エタル也

も・きしろふもの、ねをふきたて・げにいど

「六一オ

73 このましよう竹東三常静青―(こ)の
ましよう穂―のましよう国万書九白

74 薫ノ事を竹―(ナシ)穂国万書東三常
九静青白

75 なかり。(きか)し竹―なかり。(き
か)し穂―なかり。(きか)国九―なかり
きかし書青白―なかりし東―なかりしかし
三常静―なかりし(き)万

・ 教 <small>しやう</small>	<p>ましくも・わかきどちおもひかハし給つべき 人ざまになむ</p> <p>・薫と・兵部卿ノ宮とハ・常にむつひ給ふ事尤 さ有ント也・又能芸をも争様ニシ給はんも尤ト也</p>
<p>・光君・カ、ヤク 日ノ宮ト・申タル ヤウナルト也</p>	<p>・一 例の世人はにほふ兵部卿かほる中将とき、 にく、いひつゞけて・その比よきむすめおはす</p> <p>・無正事一也</p>
・兵部卿ノ宮也	<p>るやうことなきところ<small>イん</small>ハ心どきめきに 聞えごちなどし給もあれば</p> <p>・むすめなど持たぬ人 などまいらせ度など申也</p>
<p>・一 宮ハさま<small>く</small>におかしうもありぬべきわたり をばの給よりて・人の御けはひありさまを</p>	<p>もけしきとり給。</p> <p>（わざと御心につけて・おほすかたハことになかりけり）</p>
<p>・聞書 可然人のかたへハ・色々に心詞をつ くして被仰て・真実に御心にハ思召もよらぬなり</p>	<p>・一 冷泉院の一宮をぞ・さやうにても見たてまつら</p>
・匂宮ノ御心也	「六一ウ

76 むつひ給ふ事竹三―むつひ給事穂国
万書東常九静青白

77 やう（傍書「イん」）ことなき竹東常
静―やう（傍書「ん也」）ことなき穂―や
うことなき国万書三九白―やんことなき青

78 （わざと御心につけておほすかたハ
ことになかりけり）竹―わざと御心につけ
ておほすかたはことになかりけり穂国万書
東三常九静青白

79 さやうにても竹万書東三常静青白―
（さ）やうにても穂国九

な

ばや・かひあり^冊むかしとおぼしたるは・は、

女御もいとおもく・心にく、物し給あたりに

て・姫宮の御けはひげにとありがたくすぐれ

て・よその聞えもおはしますに

・并云 致仕おとこの御むすめの
弘羊殿ノ腹也
・聞書

・ましてすこしちかくもさぶらひな

れたる女ばうなどの・くハしき御ありさま

の・ことにふれてきこえたふるなども

(。と)

(。べ)

あるに・いと。しのびがたくおぼす。かめり

・冷泉院
一宮へ

・薰也

ちかくまいる女房などの・姫宮の御やうにいを
申書(を)・きかれて・猶わりなう也絶と也

・中将は世中をふ

かくあぢきなき物に・おもひすましたる心なれ

は・中く心とめてゆきはなれがたき・おも

・此中々ト云心・ヨク立タル中々也

「六二才

80 冊(な) むかしと竹―なむかしと穂国
万書東三常九静青白

81 いと(。と) 竹―いと、穂国万書東常
三九静青白

82 おほす(。へ) かめり竹―おほすへか
めり穂国万書東三常九静青白

83 申き(を) 竹―申を穂国万書東三常九
静青白

・十四ノ初ヲ書
 テ・年ヲ移シテ書
 也・上階トミル也
 ・先三位中将ニ
 テ・今宰相ニ被レ
 成ナリ

・致仕大臣ノ女ナドヲト被レ思サヤウニ有テ・心トメテハト也
 ひやのこらむなどおもふに・わづらはしきお
 もひあらむあたりにかゝづらはんハ・つゝましく
 などおもひすて給

・聞書・惣別薫の心ハ平人にはづれたる心もち也・よろづうき世
 ハはかなき事也・露の間などヲ思召て不定世界なれば世を
 ものがれんとせうする時に・心のとゞまるやうなることハ
 と・一端思ハより給事をも・口外へも不被_レ出して・お
 もひすて給なり

・同薫ノ心也

・一 さしあたりて心にしむべきことのなきほ

・賢キヤウノ事也

どさかしだつにやありけむ・人のゆるしなから

・何事モ身ニシミタル事ノナキニ依テ如此思歟ト也

薫也

むことなどは・ましておもひよるべくもあらず十

九になり給とし・三位の宰相にて・なを中将

もはなれずみかどきさきの御もてなしにたゞ

・薫の十四より十九までの事此巻にあり・次の巻にハ又立かへりて

「六二一ウ

84 一端思ハより給竹——一端ハ思より給穂
 国万東三九静青——一端思より給常書白

・先の年のこともあり云々

人にてははゞかりなきめでたき人のおほえに

・柏木の事也

て物し給へど・心のうちには身をおもひし

るかたありて・ものあはれになどもありければ

・鑑人になるやうなる事なき也

・此ノヨサノハ

軽也

・此ヤウニ・薫ノ

実法ナル事ヲ云立

テ・橋姫ノ巻ノ事

可レ書タメ也

・御年ヨリハ実法ナルト人ノ云モ・柏木ノ事・心ノ中ニ・アルニ依テノ事也惣而ノ心ハ・サ
モナキ物ヲト也

からおよすけたる心さまを人にもしられ給

へり

・是まで
薫の事也

・匂宮也・爰モ薫ノ心也

三宮のとしにそへて心をくだ

・冷泉ノ院ノ姫宮ヘ匂宮ノ心をつくし給也

き給める・院のひめ宮の御あたりをみるにも

・ひとつ院のうちにあけ暮たちなれ給へバ・こと

・薫ノ御覧スルトノ事也

にふれても・人のありさまをきゝ見たてまつるに

・（いとなべてならす心にく、）

げに。ゆへくしき御もてなしかぎりなきを

故々也

・薫ハ冷泉院ニ
候給へバ・一ツ
院ト云リ

「六三才

85 けに。（いとなへてならす心にく、）

竹一けにいとなへてならす。（心にく、）

穂国九一けにいとなへてならす。（心に

て）万一けにいとなへてならす心東一けに

いとなへてならす心にく、書三常静青白

86 候給へハ竹東三常静一候給へハ穂国

万書九青白

<p>・天然人ノメヅル ヤウ也</p>	<p>・弄云・物馴御方</p>	<p>・男ナトノ隔テ一 段セラル、也</p>	<p>・此姫宮ト薫トモ 不ニ余所ニ御間ナレ ドモ也</p>	<p>・ウキ世ニ・心 ヲ・カケウナラ バ・此姫君ト也</p>	<p>・薫の心也・薫も冷泉院の姫君をは思ひより給也　らんイ おなじくハげに　かうやうなる人を見むに こそ・いけるかぎりの心ゆくべきつまなれと おもひながら・おほかたこそへだつることなくおほ したれ・姫宮の御かたざまのへだてハ・こよ なくけどをくならはさせ給も・ことはりにわづ らハしければ　<small>・姫君と薫との間をハ一段と けとをくせらる、也・薫ハ冷二候給也・</small>あながち ・同薫ノ心也 にもまじらひよらず・もし心よりほかの心もつか ば・われも人もいとあしかるべきこと、おもひしりて ・物なれよることもなかりけり　<small>・薫の姫宮の御方へハ 万事用捨せらる、也</small> ・薫ノ心也 ・一　わがかく人にめでられむとなり給へるありさま なれば・はかなくなげのこと葉をちらし給 ・聞書・薫ハ心より人にめでられんとハ・聊も思給はず・たゞ自然ノ風流也 「六三ウ</p>
-------------------------	-----------------	----------------------------	---------------------------------------	--	---

・ 同面ニコヨナ
 ウトニアリ・前ノ
 ハ重也・是ハ輕也
 ・ 薰ハ・何様・此
 世ニ心ヲ・トメン
 トハ不_レ被_レ思_二
 依テ・ヨキ程ニ・
 セラル、也
 ・ 薰ノシタシウ・
 シ給ハンカト思ヘ
 ドモ・サモナウテ
 ツレナキ・御様体
 ヲミルモ・苦シキ
 ヤウナレドモ・又
 打絶ンヨリハト思
 テ・薰ノ御方ヘ参
 ルト也
 ・ サモ有マジキキ
 ハトハ・薰ナドヘ
 サヤウニ有マジキ
 ヤウナル人モ・ソ
 ト詞ヲモカケ給ヘ
 バ・サモアラフズ
 ル歟ト思テ・頼ミ
 ヲカクルト也

あたりも・こよなくもてはなる、心なく・なび
 きやすなるほどにをのづから猶さりのかよ
 ひどころもあまたになるを_二を_一・人のためにこと
 ことしくなどもてなさず・いとよくまぎらハ
 し・そこはかとなく・なさけなからぬほどの
 ・ 薰ノ立寄給程に・爰ヲシタシウ・シ給ハント思ヘバサモナキ程ニ・セメテ薰ヘ参テ・見申
 サント我心ニ被_レ催テ参ル也

中く心やましきを・おもひよれる人ハいざ

・ 薰ハ三条宮ニまします也

なはれつ、・三条の宮にまいりあつまるハあま

たあり
 ・ 薰のかよはる、所なども出来すれども・たやう

だいよく・名もた、ぬやうなるなり

・ 薰ノ事也

・ 一 つれなきを見るもくるしげなるわざな

・ 打絶んよりハと也

めれどたえなむよりはと心ほそきに

おもひわびて・さもあるまじき、ハの人々の

「六四オ

※「を」に濁点。

<p>・鎮 <small>トラス</small> ・河云・不離 <small>トラス</small> ・爰ハ一段見ニク キ所也 ・夕霧ノ女ヲ・薫 ヘトノ事也・ダ ニト云テハ・何ト モ末ノ詞ヘ・ツバ カヌ所也。上ノ詞 本ツバカヌ也所 （前ノ宮ノヲハ セン限リハト云） 所ヘ立婦テミル 也・サナケレハ ／＼サスカニト云詞 不立也 歌ノ下句ノ上ヘ帰 ル心也・難儀也 ・右ノヲト・モノ モノ字ニテ・跨段 也皆人ノ薫ヘ・女 ヲ參ラセ度ト・思 ト云ニテ・右ノヲ トハ・夕霧也・ 是モト云心也</p>	<p>・同薫ノ心也 ・薫ヲ見ルカラ・恨モ消ルヤウナルト也 ・さすがにいとなつかしう見所ある人・みる ・トラカサルハ・ヤウニテト云心也バカサレテ也・夕顔卷ニモ／＼タバカラレ給ヘト・源 氏ノ詞同前也 （人ミナ）心にはかるゝやうにてみすぐさるゝ同薫ノ心也 ・同薫ノ心也 一 宮のおはしまさむ世のかぎりは・あさゆふ に御めかれず御覧ぜられ・みえたてまつらむを だにとおもひの給へば <small>・女三ノ宮ヘ薫 の孝の事也</small> ・右のおとゞも あまた物し給御むすめたちを・ひとりくは <small>・言ニ不立給也</small> と心ざし給ながらえこといで給はず ・聞書・夕霧も御子たちを・独りありつけ申され度との事也 ・かはるへまいらせられたけれ共・え不立被仰出となり 同夕霧ノ心也 一 さすがにゆかしげなきならひなるをとハ おもひなせどこの君たちを・きて・ほかにハ</p>
---	--

「六四ウ

- 87 (。の御ありさまなれハ) 竹―の御ありさまなれハ 徳国万書三常九静青白―の御ありさまなるゝまハ東
- 88 (。人ミナ) 竹―人みな 徳国万書三常九静青白―人みな (人ミナ) 東
- 89 上ノ詞ヘツ・カヌ所也 竹―上ノ詞ヘツ・カヌ詞也 徳国万書九青白―上ノ詞ヘツ・カヌ所也 東三常静
- 90 (。前ノ宮ノヲハセン限リハト云) 竹―前ノ宮ノヲハセン限リハト云 徳国万書東三常九静青白
- 91 立婦テミル也サナケレハ 竹 徳国万書三常九静青白―立婦テケレハ万―立婦テシル也 東
- 92 御むすめ竹万東常青―御むすめ 徳国万書三九静白
- 93 けれ共 竹 国万書東三常九静青白―も (け) れ共 穂―か、れ共 東

\サスガニ床シゲ
 ナキ・中ラヒナル
 ヲトハ・薫ハ夕霧
 ト余所ナラネト
 モ・薫ト匂宮ト二
 人ヲ余所□ニナシ
 テハ・又ホイナキ
 事ト思給也

なずらひなるべき人をもとめいつべき世
 かはとおほしわづらふ

・聞書 ・さらに一段と又これを恋望むやうにハおほしめさねども

・又匂宮・薫などをさしをきて・よにならべん方もなきと也

・同夕霧ノ心也

・一 やむごとなきよりも・内侍のすけばらの

・惟光女・藤内侍スけ腹也

六の君とか・いとすぐれておかしげに心ばへ
 などもたらひておひいで給を・世のおほ
 えのおとしめざまなるべきしもかくあ

・落葉宮也

たらしきを心ぐるしうおほして・一条の宮

のさるあつかひぐさも給へらでさうくしきに

・むかへとりてたてまつり給へり

・聞書・やむごとなきよりもとは・本臺ノ雲居ノ雁のよりも・

藤内侍のすけ腹の・六ノ君を匂宮へ可被参となり・爰にてハ

「六五才

※「く」に濁点。

94 給へらて竹国万書三常九静白―給へ

(へ)て穂東―給(へ)らて青

95 とりて竹三常静―とり穂国万書東九青

白

<p>・人ハ其御身程人 ヲモ見知給ト也・ 匂宮薫ノヨク可 見知給ト也 ・物ノ嚴重ナルヤ ウニシテ・当代ニ 相応スルヤウニソ タテ被レ申也余ニ 古代ノ事ヲバノケ テノ事也・イカニ モ・花ヤカニノ事 也 ・親王ト書テ御子 トヨム也 ・夕霧ノ心ニ匂宮 薫ナドニ心ヲ引セ 申サン為也・根合 ・扇合・絵合・ 歌合ニハ大略先 左ニ勝ちスル者也</p>	<p>六君ノは匂宮へハ無御出也・系図ニハ宿木ノ巻にて・向取給と あり ・同夕霧ノ心也 一 わざとはなくて・この人々にミセそめてハ かならず心とゞめ給てん・人のありさまをも 見しる人ハことにこそあるべけれなどおほ 厳也ヨキ也 う して・いといつくしくハもてなし給はず・いま めかしくおかしきやうに物ごのミせさせて 人の心はつけむたよりおほくつくりなし給 一説に ・聞書 ・姫君たちを殊に奥ぶかくハせい得・ちと人にミせらるゝ 此儀如何也 ・弄云 やうに・心もちをせらるゝ也 ・普通のいつくしさをばをしへ なし給はずと也・物ごのミなどことをしへて・人の心を よせんとなり ・同夕霧ノ心也 ・此時右大臣ニ成テ大將かけて射給ノ事也 一 のり弓のかへりあるじのまうけ・六条院 にていと心ことにし給て・みこをもおはしまさ 「 六五ウ</p>
---	---

96 見しる人ハ竹三―見しる人ハ穂国万書
東九青白―しる人ハ常静

97 心は竹―心に穂国万書東三九青白―心
常静

98 絵合歌合ニハ竹東三常静―絵合ニハ穂
国万書九青白

・賭弓射礼ト云ハ・建礼門院ニテ被行也
 ・武家ニハ射礼ト云也ジヤライ・カ本ナルヲ・何ト云付タル事ゾト也・常ノ賭弓ハ・正月十八日也・四府ガ参射ル也・殿上ノ賭弓ハ臨時也大将モ射給也・沓ヲハイテ射也・弘仁二年嵯峨天皇ヨリ初也・カケモノアル也・負方必ズ帰リニ・蒙応シ給也・此時夕霧左ノ大将ニテ負方也・相撲ニモ在之也
 ・孔子モ射ラレタル也・身ヲ納メン為也身ガ納ラネバ矢サキ違者也・薫廿一オノ正月也・花鳥ニ被勘タルモ・相違也・霜別筑紫へ被下其後美濃へ被下時・年立ト云物セラレタル・是モ違也ノリ弓ハ・正月ニテ年□□シタルヲ・ヌカサレタル也・カホル廿一才也

・のり弓の事・河海に委みえたり・あるしまうけハ・蒙応也

せんの心づかひし給へり・その日御子たちおと

・薫ノ廿才の正月ノ事也
 ・明石中宮ノはら也

なにおはするはミなさぶらひ給・きさいばらのはいづれともなく・けたかくきよげにお

・匂宮也

はします・中にもこの兵部卿の宮ハげに

・更衣腹也

いとすぐえてこよなうみえ給・四のみこひたちの宮と聞ゆる・かういばらのはおもひなし

にや・けはひこよなうおとり給へり・例のひだ

・花鳥ノ勘ハ・三ヶ年違也・イツモ夜二入ガ今度ハ早ク果タル也

・薫也(。大将まかで給)

りあながちにかちぬ・れいよりハとくことはて・

聞書 のり弓左・勝也・此物語にハ・勝負左右の内大略左勝也

・総合韻ふたぎなども皆左・勝とみえたり・それに例の左・穴がちにかちぬと・書たる歟云々・此時薫ハ左大将也

・中務宮也・中書王也

・一 兵部卿宮・ひたちの宮・きさきばらの五の宮

明石中宮ノ腹也・系図ニ・五ノ君トアル同事也

「 六六才

99 のり弓の事竹常―(肩付「聞書」)のり弓の事穂国万書東三九静青白

100 明石中宮ノ竹東三常静―明石中宮穂国万書九青白

101 射礼竹東三常静―射礼穂国万書九青白

102 宮と竹東三常静―宮ハと穂国万書九青白

103 (。大将まかで給) 竹―大将まかで給穂国万書東三常九静青白

104 在之也竹東三常静―(ナシ) 穂国万書九青白

<p>・殿上射礼ニハ公卿アル也出ルニ警^イシ・入ニ蹕^ヒス</p>	<p>・御子達ノ供奉ヲバセラレマジキ歟ト・夕霧ノ、給也</p>
<p>・夕霧ト同車也 とひとつくるまに・まねきのせたてまつりてま</p>	<p>・薰也 かで給・宰相中将ハまげがたにてをとなくまかで給にけるを・みこたちおはします御をくり</p>
<p>・此三八皆夕霧ノ子たち この衛門のかみ・権^中・納言・右大辨などさらぬ かんだちめ・あまたこれかれにのりまじり・い ざなひたて、六条院へおはす ・弄云・賭^{イナ}弓に 負たる方の近衛どもハ・かへりあるじにまじらぬ義也・勝方 の大将饗応するを・かへりあるじといふ云々・薰ハ負 方にて被^レ出を・押と、めての事也</p>	<p>・一 みちのや、ほどふるに・雪いさ、かちりてえんなる たそかれ時^{トキ}なり・物のねおかしきほどに</p>

「六六ウ

105 親王ト書テ御子トヨム也竹白―親王ト書テ御子トヨム也穂国万書三常九静青―親王ト書テ御子トカク也東

106 夕霧ノ心ニ匂宮薫ナトニ心ヲヒカセ申サン為也竹―夕霧ノ心ニ匂宮薫ナトニ心ヲヒカセ申サン為也穂国万書三常九静青白―夕霧ノ御心ニ匂宮薫ナトニ心ヲヒカセ申サン為也東

※「中」「時」に濁点。

・趣過シタル事ト
聞エタル也
・婦リアルシノ作法・定マリタル物也・親王大臣ハ奥ニ可_レ付給事ナレドモ今日ハ中少将ノヲ本ニスルニ依テ初ラスル也本座也・上カド云ハ座ヲ下シメ也
・拾遺引歌ノ千早振平野ノ松ノ枝シゲミ千代モ八千代モ色ハカハラジ
・求子ノ歌也・
雑藝也
・是ハ・弄云・舞のさま非ニ神事ニ云々
・婦嬰ニ・舞也
・カウル袖イ一本

ふきたてあそびていり給を・げにこゝを

・六条ノ院ノ妹也悉皆融公ノ事ヲ含テ書也

をきて・いかならんほとけの御くに、かは・かやう
のおりふしの・心やりどころをもとめむ
とみえたり・しん殿_レのみなみのひさしに・つねの
ごとみなミむきに中少将つきわたり・きた

・垣下也・三垂ハ濁テ被_レ説也

むきにむかへて・ゑか_レのみこたちかむだちめ

・垣下トハ
相伴也

御かはらけなどはしまり

・求子 風俗

て・物おもしろくなりゆくに・もとめこまひてか

袖ヲ翻ス事也一本ニ鳥ノ打返ス羽風ト在之 乙通女卷ノニモアル也

よへるそでとももの・うちかへす羽かぜにおまへ

ちかき梅のいといたくほころびこぼれたる

にほひの・さとうちちりわた(れ)るに・例の中将

清テヨム也

・薫也

「六七七

※「殿」に濁点。

※「か」に清濁両様の声点。

107 被_レ説也竹東三常静―説也穂国万書九

青白

108 雑芸也竹東常―誰芸也穂国万書三九静

青白

109 わた(れ)るに竹三―わたれるに穂

国万書東常九静青白

<p>・引歌／降雪ニ色 ハマガヒヌ梅花香 ニコソ似タル物ナ カリケリ・是モヨ ク・相応歌也</p>	<p>の御かほりのいとゞしくもてはやされて・いひし らずなまめかし・はつかにのぞく女ばうなど も／やミはあやなく心もとなきほどなれど・香 にこそげににたる物なかりけれとめであ へり ・薫の匂ひハ無隠となり・梅ノ事ヲ不謂也 ・古今・引歌 ／春の夜の闇ハあやなし梅花色こそみえねかやハかくる、</p>
<p>右中将右少将也</p>	<p>・一 おとゞもいとめでたしとみ給・かたちよいの ・夕霧ノ息女ヲマイラスベキト被思テ也 つねよりまさりて・みだれぬさまにおさめたる ・夕霧ノ詞也・薫への給也・此時右大臣ニテ左大臣カケ給也・夕霧ノ事也 を見て・みぎのすけもこゑくはへ給へや・い たうまらう人だ、しやとの給へば ・聞書・薫の負がたにて口閉てゐ給ほどに・夕霧りのいさめてか やうにの給也・取モタラレヨ・今日ハ左右ノキハヲ立ル日ナ レドモト也</p>

・薫ノ鉢也

・同詞也・第二ノ句ヲ薫ノ・付ラレタル也

・一　にくからぬほどに神のますなど

・夕霧にいはされて・にくからぬやうに二番めより助音
をせられたるなり云々

・弄云

・求子ノ歌

・宋　決風俗云々

・此留リノノナド作者ノ詞也・歌ニツ、ト云ヲ・今ハムサトシタル所ニ・ツ、ト留ル也

ノ身モコガレツ、ナドガ・本ノツ、也・爰ノモ・祿ナド給・色々ノ事ヲ思テ・ナト

ト留ル　面白也・若菜ニノ摩迦ビルサナトアルモ・同事也



「六八才

110　云々竹東三常静——(ナシ)　穂国万書九
青白

111　未　竹常——未^タ　穂国万書東三九静青白

112　(ナシ)　竹国東三常静青白——校畢穂
万書九